

市営若宮住宅建替工事に伴う
神並遺跡第26次発掘調査報告

平成13年3月

東大阪市教育委員会

卷頭図版 SD25出土の施釉陶器



左：綠釉陶器碗（第22図49）
中：綠釉陶器碗（第22図48）
右：灰釉陶器壺（第22図52）

はしがき

わが東大阪市に聳え立つ生駒山のふもとには、数多くの貴重な文化遺産－遺跡が眠っています。その中でも石切地区は縄文時代の太古から集落が営まれ、遺跡が密集しています。今回報告します神並遺跡はその一つで、近畿地方で最古級の縄文土器が発見され広く知られるようになりました。今年度実施しました第26次調査では、平安時代前期の集落跡が検出され、新たな知見を得ることができました。その詳細については本書に記すとおりです。

本市としましては、これら遺跡調査の成果をいち早く公表し、埋蔵文化財の保護・顕彰に努めるため本書を刊行いたします。

本書が埋蔵文化財保護行政の報告書としてだけでなく、地域の歴史を掘り起こす冊子として広く読まれることを祈念して、はしがきといたします。

平成13年3月

東大阪市教育委員会

例　　言

1. 本書は、市営若宮住宅建替工事に伴う神並遺跡第26次発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は、東大阪市長の依頼を受けて、東大阪市教育委員会文化財課が実施した。
3. 調査にかかる費用は東大阪市が負担・用意した。
4. 現地の調査は平成12年6月19日から同年8月17日まで、遺物整理は現地調査終了後から平成13年3月31日まで実施した。
5. 現地調査は菅原卓太・岩間俊之を担当として実施した。遺物整理は才原金弘の指導のもとに横原美智子を担当として実施した。
6. 本書の挿筆は、「V 出土遺物」を菅原が、その他の章節を菅原が行った。編集は菅原が行った。
7. 遺構実測図の水準高は、T.P.値を用いた。単年度で概要報告書として刊行するため、遺構実測図には空中写真測量による図面を多く使用したほか、個々の遺構の規模については、巻末に遺構一覧表として掲げた。参照いただきたい。
- 遺構の略号は次のとおりである。

S P	ピット・柱穴	S D	溝・溝状遺構・谷地形
S K	土坑	S X	その他の落ち込み状遺構

8. 遺構写真は菅原が撮影し、遺物写真は株式会社アステムに委託の上、撮影した。
9. 現地の土色および土器の色調は、農林水産省農林水産技術事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』(2000年版)に準拠し、記号表示も同書に従った。
10. 基準杭・調査杭の打設は興亜測量株式会社に、空中写真測量は株式会社アコードに、それぞれ委託の上実施した。
11. 現地調査実施にあたっては、東大阪市建設局建築部住宅政策課・大昭和建設株式会社・安西工業株式会社の方々から多大なご協力をいただいた。記して謝意を表する。
12. 現地調査および報告書作成にかかる遺物整理には、下記の方々の参加を得た。

西野　剛・西本美也子・大木祥太郎・堀口悟史・小山善弘

本文目次

I	はじめに	1
1) 神並遺跡の概要	1	
2) 調査にいたる経過	1	
II	位置と環境	3
III	地区割と層位	5
1) 調査方法と地区割	5	
2) 層位	6	
IV	調査の概要	9
1) ①区の調査	9	
2) ②区の調査	15	
3) ③区の調査	18	
V	出土遺物	21
1) SD25出土遺物	21	
2) SD26出土遺物	24	
3) 第2・3・4・6層出土遺物	25	
4) 石製品	25	
VI	まとめと課題	27
1) 神並遺跡第26次調査検出遺構の時期別変遷	27	
2) 第26次調査出土遺物の位置付けについて	28	
3) 今後の課題	29	

挿図目次

第1図	試掘調査地点位置図	2
第2図	神並遺跡の調査地点位置図	3
第3図	神並遺跡とその周辺の遺跡	4
第4図	調査地区割図	5
第5図	各地区土層断面図	7~8
第6図	①区遺構面I 銚溝群平面図	9
第7図	S D25等高線図	10
第8図	①区遺構面II 遺構実測図	11~12
第9図	②区遺構面III 遺構実測図	11~12
第10図	S D25断面図	13
第11図	S D25-2層内遺物出土状況実測図	14
第12図	②区遺構面II 遺構平面図	15
第13図	掘立柱建物1実測図	16
第14図	S P44~47の柱通り実測図	16
第15図	掘立柱建物2実測図	16
第16図	②区遺構面III 遺構平面図	17
第17図	③区地山層上面検出遺構平面図	18
第18図	掘立柱建物3実測図	18
第19図	土坑・井戸・平面断面集成図	19
第20図	①②③区遺構配置図	20
第21図	S D25出土遺物実測図	21
第22図	S D25出土遺物実測図	22
第23図	S D26出土遺物実測図	24
第24図	第2層出土遺物実測図	25
第25図	第3層出土遺物実測図	25
第26図	第4層出土遺物実測図	25
第27図	第6層出土遺物実測図	25

表目次

第1表	出土地における個体数と重量の関係A・B	26
第2表	石器観察表	26
第3表	S D25出土土器の破片数比率	29
第4表	遺構一覧表	30~32

図版目次

- 図版1 航空写真
- 図版2 ①区の調査 1. 銅溝群検出状況(東より) 2. 北壁断面
- 図版3 ①区の調査 1. S D25検出状況(東より) 2. S D25-1層掘削後状況
- 図版4 ①区の調査 1. S D25-2層掘削後状況(東より)
2. S D25-2層掘削後状況(西より)
- 図版5 ①区の調査 1. S D25南岸土坑・柱列検出状況(東より)
2. S D25南岸土坑・柱列完掘後状況(南より)
- 図版6 ①区の調査 1. S D25-1層内遺物出土状況(東より)
2. S D25-1層内遺物出土状況近景(北より)
- 図版7 ①区の調査 1. S D25-2層内遺物出土状況近景(北より)
2. S D25-2層内遺物出土状況近景(北より)
- 図版8 ①区の調査 1. S E1検出状況(南より) 2. S E1掘削後状況(西より)
- 図版9 ①区の調査 1. S K6掘削後状況(西より) 2. S K7掘削後状況(東より)
- 図版10 ①区の調査 1. S D25土層断面(中央部) 2. S D25土層断面(西北端部)
- 図版11 ②区の調査 1. 遺構面I 遺構検出状況(東より) 2. 遺構面I 遺構掘削後状況(北より)
- 図版12 ②区の調査 1. S D26検出状況(東より) 2. S D26検出状況(北より)
- 図版13 ②区の調査 1. 遺構面II 遺構掘削後状況全景(S D26中心、東より)
2. S D26掘削後状況(北より)
- 図版14 ②区の調査 1. S D26内遺物出土状況(西より)
2. S D26内遺物出土状況近景(西より)
- 図版15 ②区の調査 1. 掘立柱建物1検出状況(東より) 2. 掘立柱建物1掘削後状況(東より)
- 図版16 ②区の調査 1. 掘立柱建物2掘削後状況(北より) 2. 掘立柱建物2完掘後状況(北より)
- 図版17 ②区の調査 1. 遺構面III 遺構検出状況(東より) 2. 遺構面III 遺構掘削後状況(西より)
- 図版18 ②区の調査 1. 土層断面(東側) 2. 土層断面(西側)
- 図版19 ③区の調査 1. 掘立柱建物3他検出状況(西より)
2. 掘立柱建物3他掘削後状況(西より)
- 図版20 S D25出土土器 1. 須恵器杯身(7・8・15)皿(16) 2. 須恵器蓋(1~3・6)
- 図版21 S D25出土土器 1. 須恵器杯身(9・11~14) 2. 須恵器壺(19・22)
- 図版22 S D25出土土器 1. 須恵器壺(17・18・25)甕(20・21)甌(23)土師器羽釜(47)
- 図版23 S D25出土土器 1. 須恵器壺(24・27)杯身(26)
2. 土師器杯(30~32・36・38~40)
- 図版24 S D25出土土器 1. 土師器碗(33・34)綠釉陶器碗(35)杯身(51)須恵器壺(50)
2. 土師器把手(41)壺(43)甕(44・45)羽釜(46)
- 図版25 S D25・S D26出土土器 1. 丸瓦(55)平瓦(53・54)
2. 須恵器高杯(57)脚部(58)杯(60)
- 図版26 S D26出土土器 1. 須恵器蓋・高杯(56)・脚部・杯(59・61)
2. 土師器壺(67)把手(66)杯(68・69・70)

図版27 S D26出土土器 1. 須恵器鉢(62) 平瓶(63) 捣鉢(64) 土師器高杯脚部(65)

図版28 S D25出土弥生土器・S D26獸齒 1. 弥生土器 2. 獣齒

図版29 S D25ほか出土石製品 1. 石製品 2. 石製品

I はじめに

1) 神並遺跡の概要

本書は、東大阪市東山町1180番地の1において、平成12年6月から8月に行った神並遺跡第26次発掘調査の概要報告書である。

神並遺跡は、東大阪市東石切町1丁目・西石切町1丁目・額田町にかけて広がる縄文時代早期から室町時代にいたる集落跡である。遺跡は現在の近鉄東大阪線建設と国道308号線拡幅の工事に先立って実施された試掘調査によって昭和55年に発見された。翌56年2月に第1次の発掘調査が実施されて以来、今回の調査を含め現在まで28次の調査を数えている。

これらの調査のうち、23次までの調査成果については、先ごろ刊行された報告書¹に要を得た総括がなされているので参照していただきたい。また第25・27次調査は本書と並行して刊行が予定されている報告書²に成果が掲載されることになっている。第28次調査も同様である³。ここでは、第24次調査の概要について紹介しておきたい。第24次調査は、平成11年4月から6月にかけて行われた。下水道の管渠整理工事に伴う調査で近鉄東大阪線のすぐ北側に所在する東西道路下にあたる。対象道路の東半分で10世纪代と12世纪後半代の2時期にわたる遺物がまとめて出土した。

これまでの調査成果により、神並遺跡は、東西約550m、南北約300mの範囲にわたることが明らかとなつており、この範囲の中で埋蔵文化財包蔵地として行政上の保護施策が図られているところである。次に時期別の成果についていくつか見ることにする。まず近畿地方で稀有の縄文時代早期の遺構・遺物が検出されている。遺構には、集石土坑・焼土坑などがあり、遺構検出地点から南へ下る緩傾斜面の凹部に多量の神宮寺式押型文土器が出土した。押型文土器には有舌尖頭器が伴出していることから、押型文土器の縦年上の位置付けをめぐって喧しい議論が展開された。古墳時代中～後期については、同期の掘立柱建物を中軸に溝や土坑が発見されている。第5・13次調査では集落内での鍛冶操業に伴うとみられる製鉄関連遺物が一括で出土した。平安時代後半期を含む中世の遺構・遺物は、前記第24次の調査成果のように、遺跡の東半分で濃密に分布している。とくに第1次調査での遺構の様相は中世集落論に具体的な素材を提供した。(以上、これまでの知見をもとに、前掲註1文献を参考にして概述した。)

2) 調査にいたる経過

東大阪市菅若宮住宅は、東大阪市の前身、枚岡市の成立以前、昭和28～29年度に建設されたもので、築約50年を経過しており、平成5年度に策定された「東大阪市公共住宅再生マスター・プラン」に基づき、建替工事が企図された。敷地は約5,700m²である。

敷地内は周知の遺跡・神並遺跡の範囲内にあたることから、建替え工事の実施による埋蔵文化財への影響が懸念された。そこで、東大阪市建設局(担当住宅政策課)と東大阪市教育委員会(担当文化財課)では、敷地内の埋蔵文化財の確認・発掘調査対象箇所設定など調査計画立案の基礎資料を得るため、試掘調査を実施した上で、埋蔵文化財の取扱いをめぐる協議を進めることとした。試掘調査は既設建物の撤去が完了次第行うこととなり、都合下記の3回にわたり実施された。

- ① 平成11年1月19日～1月29日(第1～第13トレンチ、182m²)
- ② 平成11年9月1日～9月3日(第14～第17トレンチ、60.8m²)
- ③ 平成12年1月25日(第18トレンチ、23.4m²)

工事予定地内では、後世の開墾作業により遺物包含層が滅失していることが推測されるため、試掘調査は既設建物の制約を受けつつ、東西に長いトレンチ設定を基本とした。トレンチは18本に及んだ(第1

図)。その結果、敷地の中央やや西側で南よりの箇所、第11トレンチ・第17トレンチ・第18トレンチにおいて遺構・遺物の検出をみることになった。このうち、第17トレンチの試掘調査結果については、後述するSD25との関わりが深いためここで摘要しておく⁴。地表面下には2時期の耕作面の造成が見られ、その下面には奈良・平安時代～中世期にいたる遺物包含層が2層認められている。特に、「第7層の中位では櫛群とともに、須恵器・土師器・灰釉陶器などがまとまった状態で出土した。」とある。そこで試掘調査では遺物が集中する箇所は取り上げのちそのまま置き、敢えて深掘りを避けられている。また「トレンチ東側で地山面が30～40cm落ち込むことが確認されており、何らかの遺構が存在した可能性がある。」と述べられている。この落ち込みは、発掘調査の結果SD25に相当することが判明した。

東大阪市建設局と東大阪市教育委員会では、上記の試掘調査結果を踏まえ、建替工事の基礎部分やピット掘りに伴い埋蔵文化財が破壊されるおそれのある3ヵ所、計326m²について事前の発掘調査を行うことで双方合意に至った。発掘調査は平成12年6月19日から8月17日まで実施した。

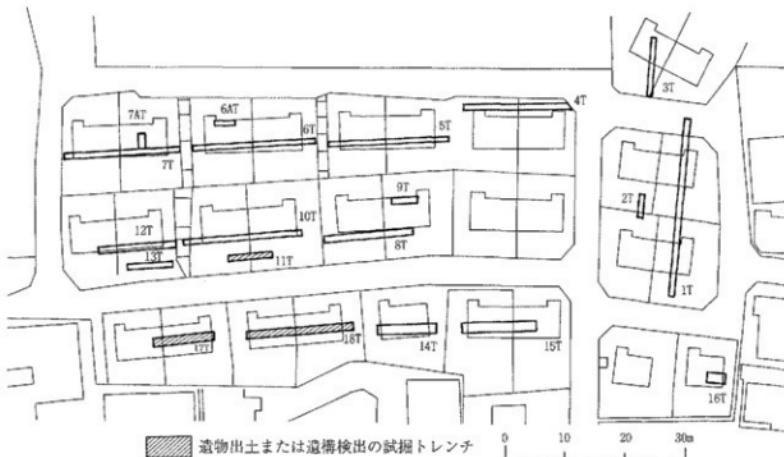
ここで、調査の経過について触れておく。平成12年6月19日から現地で発掘調査の準備に入った。まず6月26日から②区の機械掘削に着手した。6月29日には引き続き①区の機械掘削を開始した。②区では7月1日より人力の掘削に移った。③区は機械掘削の結果、遺物包含層が削平され地山層がすぐ露出していることが確認されたため①・②区の進捗状況に応じて精査することとした。人力掘削の過程で、遺構面精査(遺構検出)、遺構の掘り下げ、写真撮影、図面作成を適宜行った。遺構平面図の作成は㈱アコードに委託の上実施した。遺構面の調査が終了後、下層の掘り下げを順次行い、調査区壁面の土層断面図を作成した。最後に、調査地の埋め戻しを行い、現地での調査を平成12年8月17日に全て完了した。

⁴財団法人東大阪市文化財協会『神並遺跡発掘調査報告集－第9・10・18・19・22次調査－』、2000年。

⁵東大阪市教育委員会『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報－平成12年度－』、平成13年。

⁶東大阪市教育委員会『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告－平成12年度－』、平成13年。

⁷以下、試掘調査の所見は②の試掘調査報告に基づく。



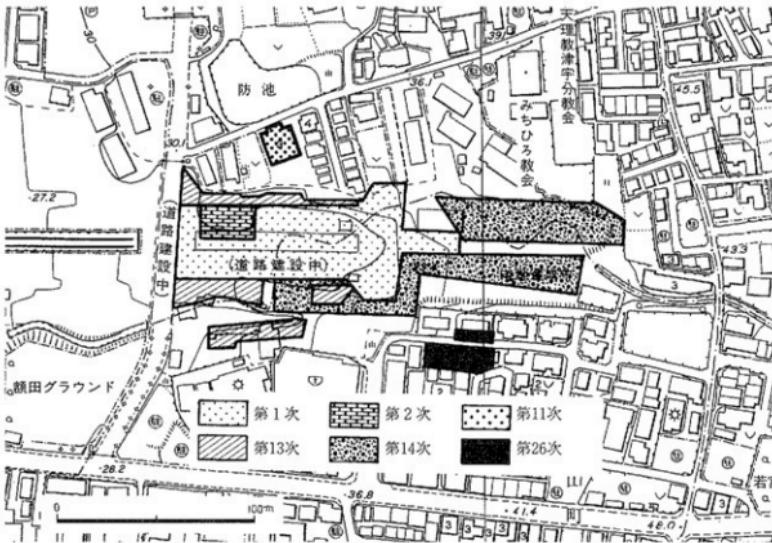
第1図 試掘調査地点位置図

II 位置と環境

神並遺跡は、標高15~45mの中位段丘上に立地する。今回の調査地は、遺跡の最東端に位置する。調査の東端の地表面でT.P.約39.0m、西端でT.P.約37.6mを測り、約1.4mの比高差を持つことになる。さらに今回の調査地は、現在近鉄東大阪線や第二阪奈有料道路の建設工事のため暗渠化している鬼虎川の左岸域にあたる。そこで、市道若宮東西線から石切鏡箭神社・絵馬堂に通じる南北道(「石切参道」と通称)より東側で実施された主な調査地を図示してみた(第2図)。第13次調査の鬼虎川右岸域(C地区)では北側から廃棄された多量の古墳時代中~後期が発見されるなど対照的に、左岸域にあたるB地区では遺物量が稀少であったことから、鬼虎川の前身河川ないし埋没谷により集落が区画されることが予想された。なお、神並遺跡の地形・地質条件については、Iの註1文献に詳説されており、ここでは省略したい。

神並遺跡の周辺には、各時期の遺跡が密集中して存在する。旧石器時代に遡る遺跡として、正興寺山遺跡・芝坊主山遺跡があり、ナイフ型石器が採集されている。縄文時代には、前期から中期にかけての海岸線が鬼虎川遺跡で発見されている。海岸線の堆積層から縄文土器や石器とともに、クジラ・イルカなどの動物遺体が多数出土した。後期になると遺跡数は増大する。北方の日下遺跡では府下では類例の少ない貝塚で、「日下貝塚」として戦前から著名である。土坑墓が多数検出されている。貝層の下面からは堅穴住居も見つかっている。土坑墓は環状にめぐるものがあり、墓制研究の上から注目されている。

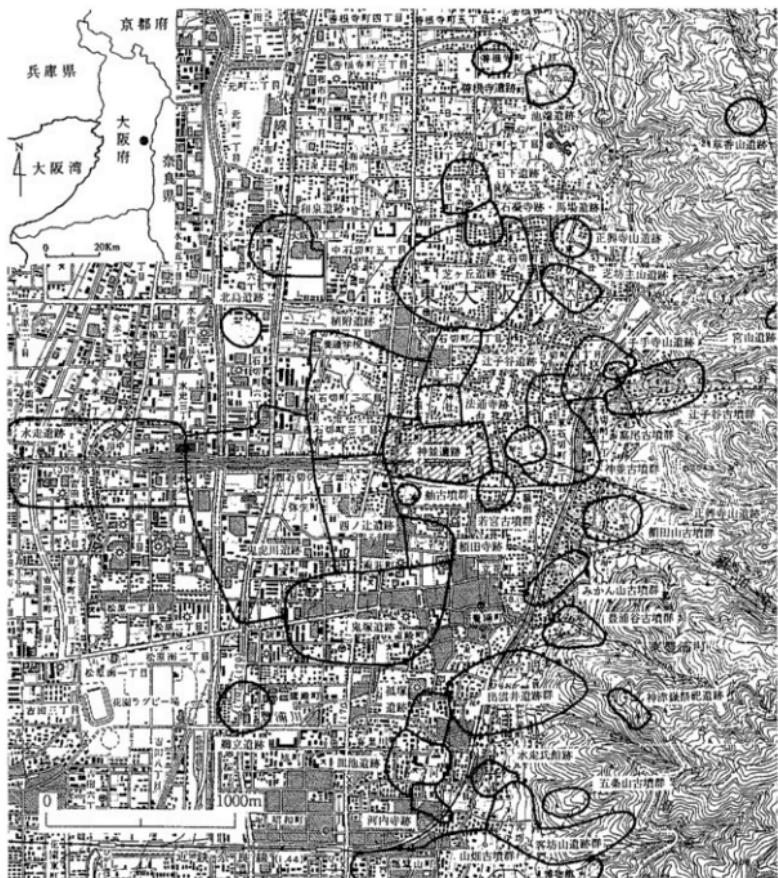
弥生時代に入ると、稲作の導入に適した低湿地に集落が立地し、現出する。神並遺跡の西に接する西ノ辻遺跡は土器様式研究から後期の標式遺跡として著名である。さらに近年の大規模調査により、北の植附遺跡とは埋没谷を挟み隔離しており、埋没谷の南縁には中期の方形周溝墓が広がることが明らかとなっている。中期、河内湖の縁辺には巨大な撫点集落が出現する。市域では、鬼虎川遺跡・瓜生堂遺跡が



第2図 神並遺跡の調査地点位置図

それに該当する。平成10年度の鬼虎川遺跡の調査で、大型のヒスイ製勾玉が出土した。材質鑑定によると新潟県糸魚川産であり、該地との交易を通じた製品の伝播の問題とともに、大型勾玉を保持したえた鬼虎川弥生集落の在地首長の優位性を窺うことができる。後期になると、集落の規模は縮小するが遺跡数は増加する。この時期から開始する集落として、芝ヶ丘・皿池・岩滝山の各遺跡を挙げることができる。「倭國大亂」の関連から高地性集落の役割が注目される。

古墳時代では、鬼虎川遺跡の東域部で竪穴住居や掘立柱建物など集落跡が検出されるほか、山麓部に後期群集墳が現存している。また飛鳥時代後期には、河内寺や法通寺など在地豪族の建立にかかる氏寺が見られ、神並遺跡周辺は古代からの在地住人の活動がしのばれる遺跡の宝庫となっている。



第3図 神並遺跡とその周辺の遺跡

III 地区割と層位

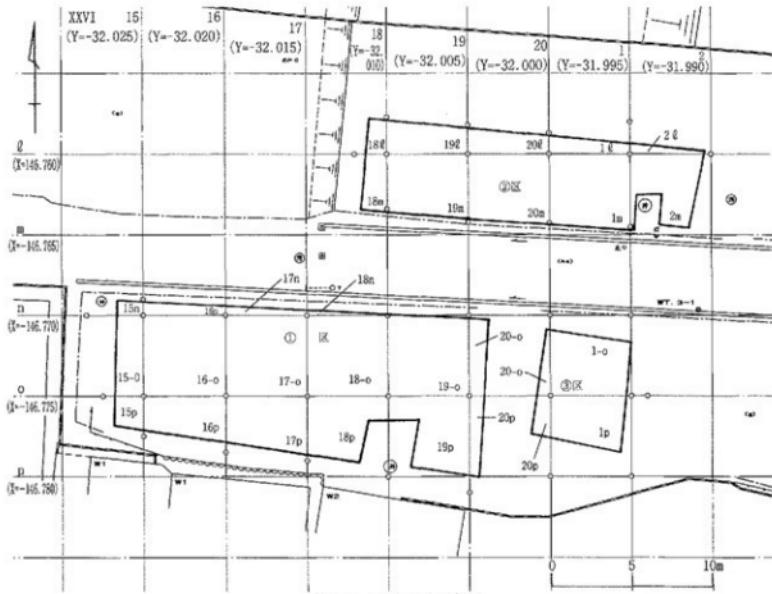
1) 調査方法と地区割

今回の発掘調査にあたっては、地表面から上部0.4mを重機で掘削・除去し、下部1.0mを人力で掘削することとした。人力掘削の範囲で遺構面や遺物の検出に努め、写真の撮影や平面図・断面図の作成を適宜行った。試掘調査で既に指摘されていたように、調査地周辺は後世の開墾作業により大部分の遺物包含層が減失していることが予想されたため、遺構面の把握と遺構個々の認識が要求されることになった。その中で試掘調査第17トレーナーで出土した平安時代前期ごろの遺物包含層と該期の遺構の追完は、東大阪市域において現在まで検出例に乏しいところから、いきおい調査の目的として課せられることとなった。

今回の調査では、前述したように、試掘調査で遺構・遺物が出土したトレンチと建替工事の掘削深度などを勘案して、工事実施により埋蔵文化財に影響が及ぶ箇所に調査区の設定を行った。その結果、道路を介在して3地区に分かれることになった。①・②・③区の名称は建替工事を担当する東大阪市建設局の区分によるもので、発掘調査においてもそのまま踏襲することにした。大地区ごとの面積は以下の通りである。

① 200.0m³ ② 92.0m³ ③ 34.0m³ 合計 326m³

なお、①区と②区については井戸戸が現存しており、工事での取扱いが未定であるため、調査対象から除外し、未調査地となっている。各大地区内の地区割は、国家座標系を採用することにした。建設省告示(昭和43年)による第VI座標系に該当する。鬼虎川遺跡の調査と同様、原点(0点)を東大阪市川中(X = -146.2, Y = -34.6)に設定し、100mごとに東西はI、II、III、…、南北はA、B、C、…とした。



第4図 調査地地区割図

この法則に従えば、調査区の東西はXXVI区とXXVII区に、南北はF区に相当する(第4図)。図面作成と遺物取り上げの指標となる小地区は5mメッシュを用いて、大区画と同様に東西は1、2、3、…、南北はa、b、c、…、と標記した。ただし、この標記では①区と③区の中央部は160、170、180と数字と紛らわしいため、16-0、17-0、18-0とダッシュをつけて識別した。また20-0区と20p区は①区と③区に跨るが、①-20p、③-20pと標記して大地区を冠することで区別している。

2) 層位

今回、層位の設定にあたっては、試掘調査の層位をベースに②区で検出した層位を加味して行った。現地の調査で確認した層位は以下の通りである。

第1層 近現代の盛土層、擾乱層。①区西側の溜池各層①区西側の溜池の機能土層には現代のガラガラが含まれており、昭和28~29年の旧市営住宅建設直前まで調査地に存在したことが判明したため、溜池各層(機能土層・埋土層・池の掘形裏込め層)も全て第1層とした。

第2層 7.5Y4/1暗緑灰色粗粒砂混じりシルト質細粒砂。近現代の耕土層である。

第3層 5Y4/3暗オリーブ色細礫~粗粒砂混じりシルト質細粒砂。近世期ごろの耕作土層から近現代の床土層までを一括して第3層とした。耕作面の時期差により5層に分層できる。上面はマンガン粒を多く含み堅く締まる。上層はほとんど遺物を交えない。下層は平安時代の土器・須恵器、瓦器を含むが、風化が著しい。

第4層 次の第4A層と第4B層に分層できるが、①区と②区の一部では両者が混合する箇所があり、その際は、第4層として遺物の取り上げを行った。

第4A層 2.5Y4/4オリーブ褐色細礫混じり砂質シルト。平安時代遺物を主体的に含むが、極微量に瓦器片が出土。①区では第4A層上面で鐵漁群を検出した。

第4B層 2.5Y5/4黄褐色細礫混じりシルト。平安時代前期遺物包含層。②区の全体に広く見られた。②区では第4B層直下で溝・ピットを検出した。

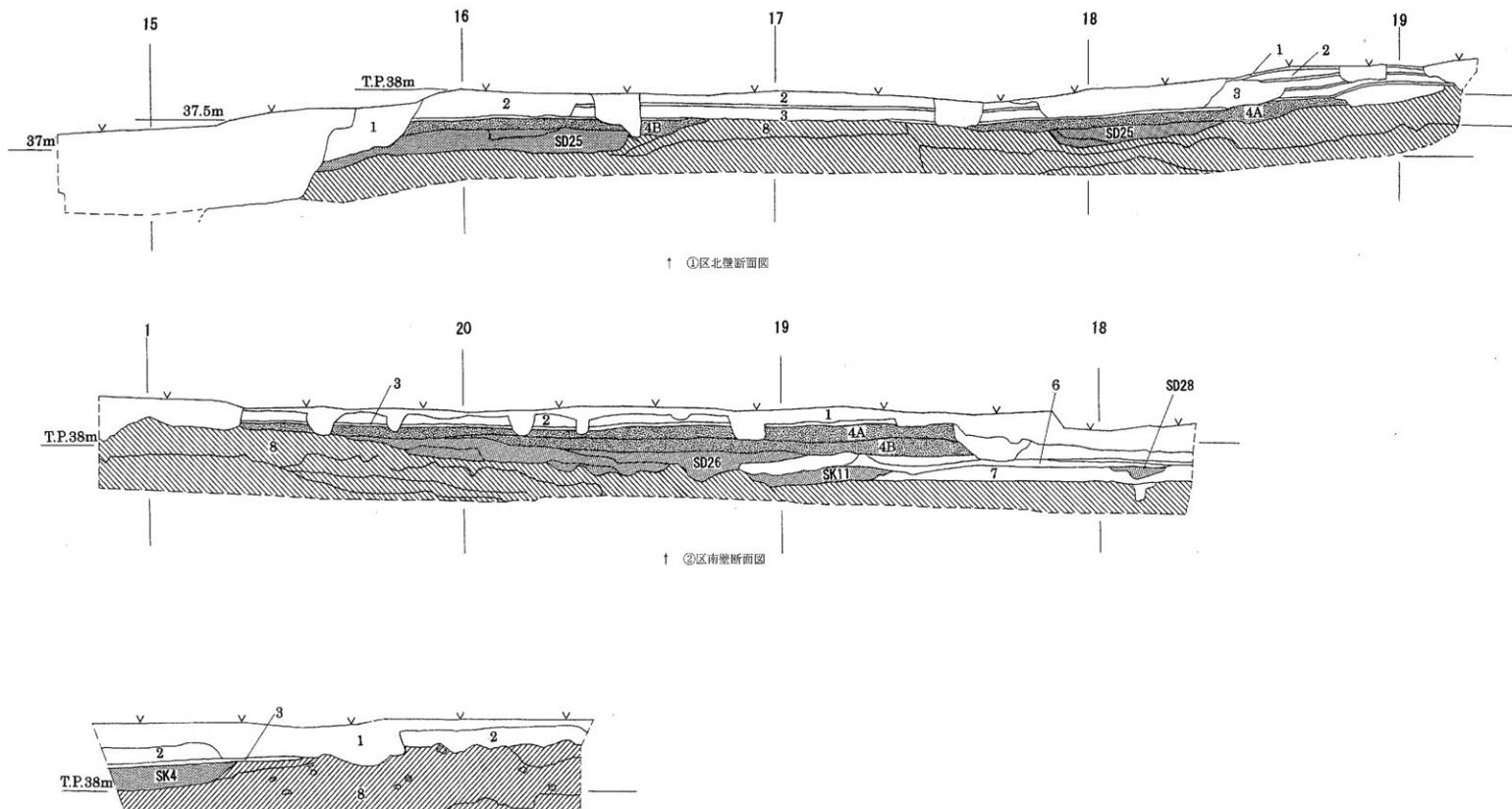
第5層 SD25やSD26など遺構の埋土。詳細については後述する。

第6層 7.5YR4/4褐色シルトと10Y4/1灰色細粒砂の混合土層。第8層の地山層とよく似ているが土質が少し鈍い。古墳時代中期末の須恵器坏蓋が出土している(第27図)。②区の中央から西側では第6層上面で溝・ピットを検出した。

第7層 5Y6/4オリーブ黄色シルトと10Y4/1灰色細粒砂の混合土層。第8層の地山層と極めて似ているが土質が少し鈍い。無遺物層。

第8層 褐色・黄褐色~暗褐色を呈するシルト質粘土、シルト、細礫、粗粒砂、中礫の互層。今回調査の最深部でも遺物は全く出土していない。地山層。ただし、現場の所見としては地盤は安定しているようには思われず、第8層自体が古段階の巨大な自然流路の堆積層の一部と推定される。

②区の東端と③区全域は、第1層~第3層の直下には第8層が露出しており、第4層・第5層の遺物包含層は消失していた。むしろ、後述するSD25の性格から西へ潜り込んで流下したために、かろうじて①区と②区の西側では遺構や遺物包含層が残存したとも言えよう。また、②区の西端と隣接する崖下との比高差は約1.7mを測り、②区の西側では遺構面は全く失われているものと推定できる。同様に、②区の北側にも現状で約1.8mを測る崖がある。試掘調査所見の信憑性が確かめられるのと同時に、少なくとも①・②・③区の北、西、東の三方において今回の調査で検出した時期の遺構が発見される可能性は極めて少ないものと考えられよう。



第5図 各地区土層断面図

IV 調査の概要

1) ①区の調査

【遺構面 I】(第6図、図版2)

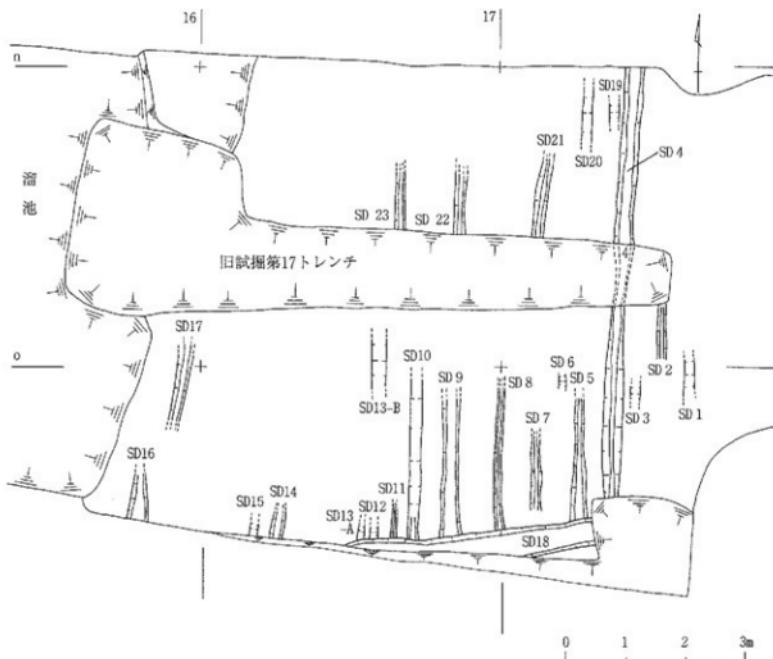
第4A層上面、16~18・0~p区で溝23条を検出した。概ね、幅20~40cm、深さ3cm程度を測る。全て耕作に伴う鏽溝と考えられる。SD4を除き遺存状態は悪い。SD12から壺底が著しい瓦器純片が出土していることから、中世期以降の所産と思われる。

【遺構面 II】(第8図)

第8層(地山層)上面で自然河川1本、土坑2基、井戸1基、ピット5個を検出した。

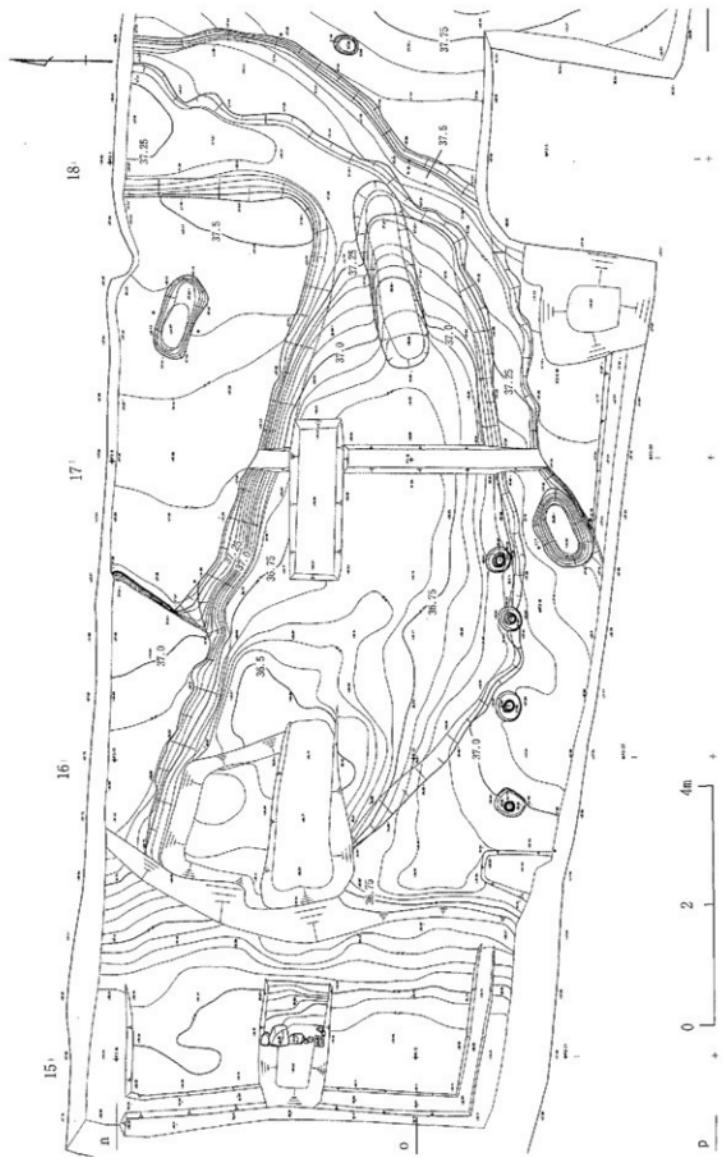
SD25(第7・10・11図、図版3~7)

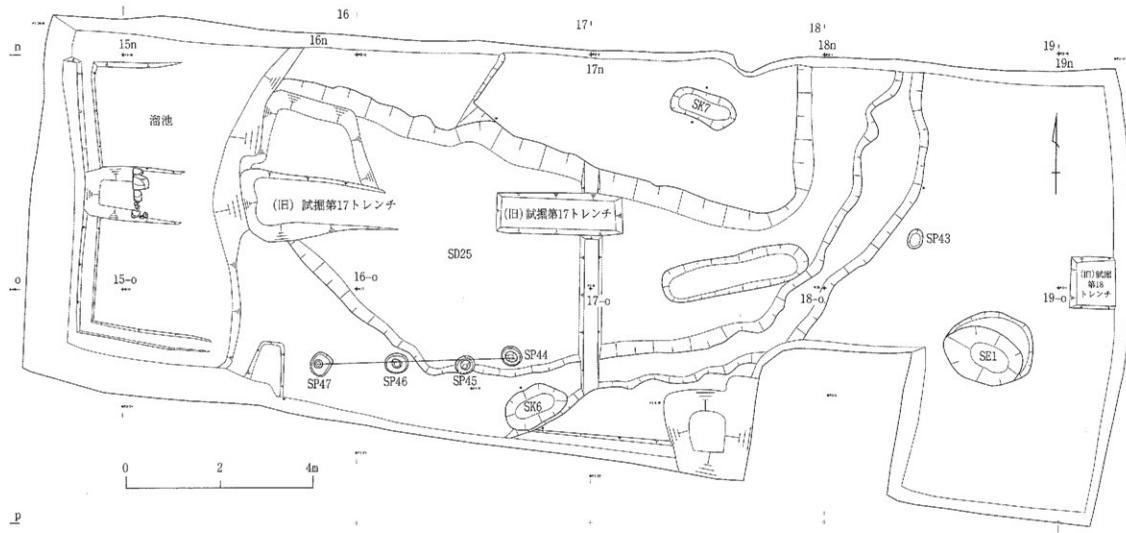
①区の大半を占める自然河川。18n区から南へ流下し、18~0区で屈曲して喇叭状に開いて西へ流下する。河川断面は北側が急で、南側が緩やかな傾斜面を描く。上流部で幅2.8m、深さ0.4m、中流部幅4.7m、深さ0.7m、下流部幅7.3m以上、深さ0.8mを測る。屈曲部の底面で、長さ3.2m、幅0.9m、深さ0.2mの長楕円形の凹部が見られる。また河川の中央でT.P. 36.7m前後の平坦面がある。調査地西側では溜池や擾乱のため滅失している。埋土は下流部断面では5層に区分できた。埋土の観察から河川土砂の堆積は下流から進



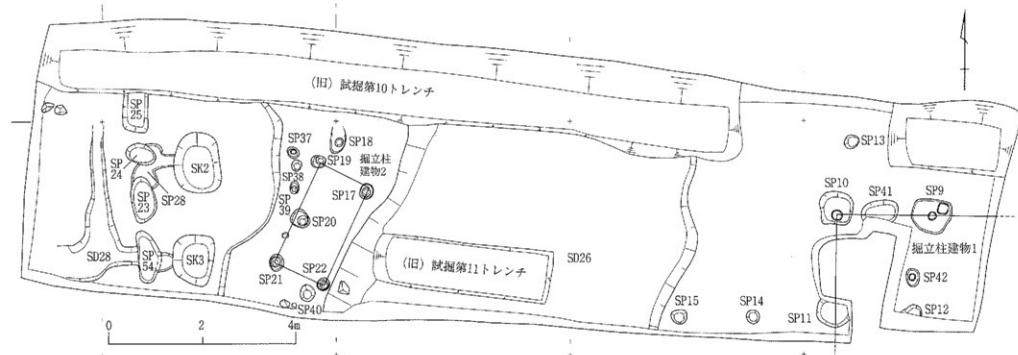
第6図 ①区遺構面I 鏽溝群平面図

第7図 S D25等高線図

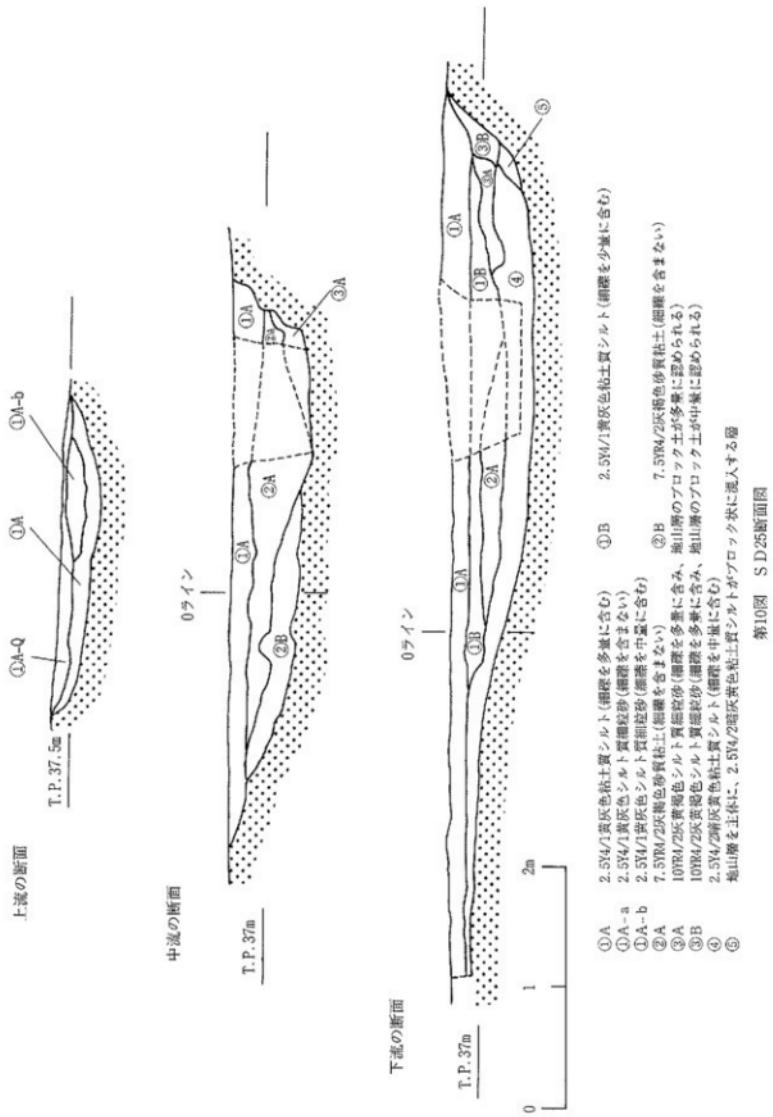




第8図 ①区遺構面Ⅱ遺構実測図



第9図 ②区遺構面Ⅲ遺構実測図





第11図 SD 25-2層内遺物出土状況実測図

行したことがわかる。現地調査では①層を1層、②～⑤層を2層として遺物の取り上げを図った。ただし、断面図に示す③～⑤層内には遺物は含まれていない。遺物は①B層下面から②A層上面にかけて顕著に認められた。とくに、②A層上面にあたる前述の平坦面では拳大の礫に混じって平安時代前期の土師器・須恵器・綠釉陶器などが一括で出土した(第11図、図版7)。遺物の出土状態や位置関係から②A層が堆積する最終段階で礫の流下があり、その折に①区の南東方向から廃棄された遺物が埋積したことがわかる。第11図のアミ目は、試掘調査報告で遺物が多量に出土した箇所である。本調査に備えて完掘されていない。第11図の遺物分布のあり方とSD25の傾斜面と試掘第17トレンチ第7層のレベルから、アミ目部分はSD25-2層内と捉えられることが判明した。このため後述の「V出土遺物」ではアミ目出土土器をSD25出土遺物として報告している。また屈曲部周辺の18-0-p区で②層の下部から第V様式の弥生土器が出土した(図版28)。これは地山層を含めた自然河川の存在と原初の流下・堆積時期を窺わせる資料といえる。以上、②A層上面で磨滅した瓦器片が出土したことを含めてまとめると、①区では、弥生時代後期ごろに原初の自然河川が存在し、それが徐々に堆積し凹地を呈した平安時代前期に調査地の南東から遺物の廃棄と礫の流下・堆積が行われ、中世期ごろに完全に埋没したものと推定できる。

SP44-47の柱通り(第14図、図版5)

16～17p区で検出した。ピットは径43～50cmの円形ないし梢円形を呈するもので規模が揃っている。SP45-46-47は柱間1.6m、SP44-45は柱間1.1mを測る。南側に続く掘立柱建物の一部と考えられる。

土坑・井戸(第19図、図版8・9)

SK6は17p区、SK7は18-0区、SE1は19p区で検出された。SK6はやや不定な梢円形を呈し2層に区分された。a層は10YR4/3にぶい黄褐色シルト質粘土で細礫を中量含む層である。b層はa層に第8層(地山層)のブロックを少量含む層である。

SK7は中央でやや括れ蕭形を呈する土坑である。底面は平坦面をなす。埋土は10YR4/1褐色細礫混じりシルト質細粒砂に第8層(地山層)のブロックを含む層である。SK6、SK7とも無遺物であったが、遺構面の状態から平安時代前期の所産の可能性がある。

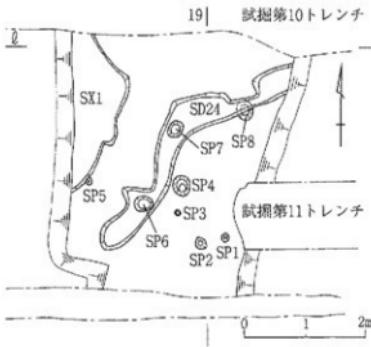
SE1は検出面から約1.5mしか遺存していない。平面形は梢円形を呈する。底面は平坦面をなす。埋土は2層に区分できた。a層は2.5Y4/3オリーブ褐色粘土質シルトに中～細礫を含む層である。b層は第8層(地山層)を主体にa層のブロックを含む層である。b層は井戸掘形の埋土と見られるが、上部が削平されたため詳細は不明である。遺物量は極少で土器片が

4片出土したに過ぎないが、黒色土器が認められることからSD25-②A層の堆積とはほぼ同時期の所産と推定できる。

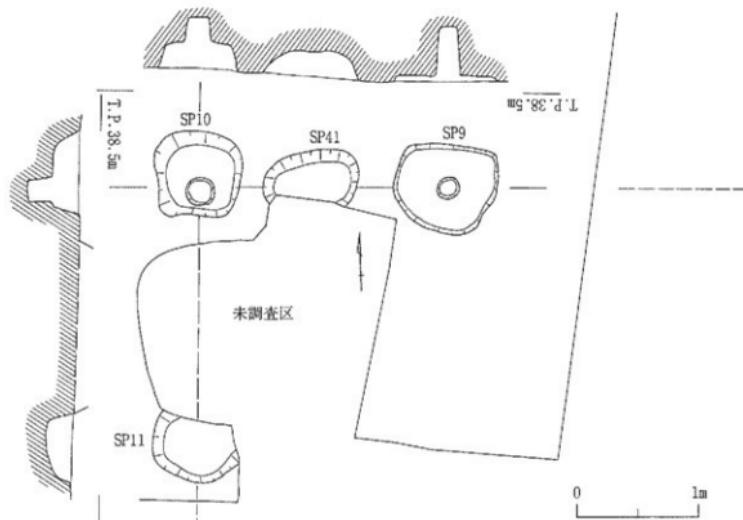
2) ②区の調査

【遺構面I】(第12図、図版11)

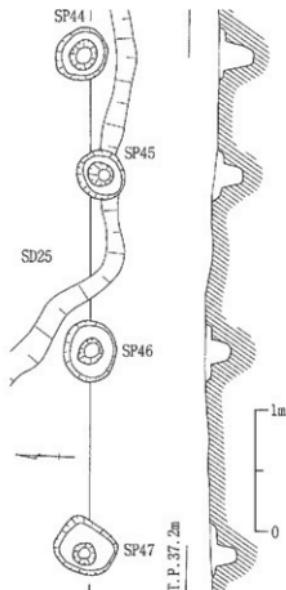
第4B層直下、19～20m区で、溝1条、ピット8個、落ち込み1箇所を検出した。SP1、SP3、SP5は杭穴である。SX1は西の崖状地形に伴うもの。SP8はSD24の堆積後に造られたものである。各遺構の遺物量は僅少で時期の特定は難しいが、後出の遺構面IIとの関わりから、鎌倉時代ごろの所産と推定している。



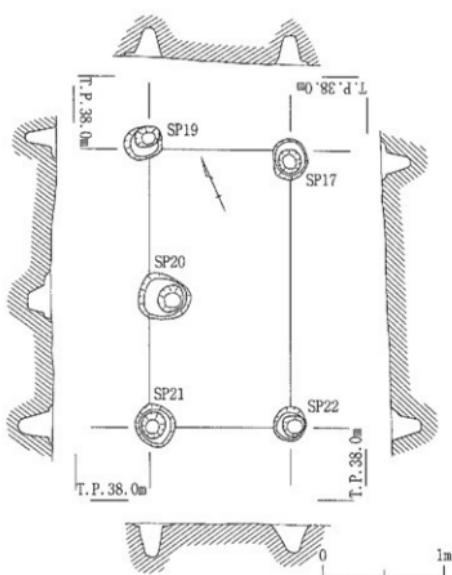
第12図 ②区遺構面II 遺構平面図



第13図 捶打柱建物1 実測図



第14図 S P 44~47の柱通り実測図



第15図 捶打柱建物2 実測図

【遺構面II】(第9図)

調査地の全面、第6層上面から第8層(地山層)上面で、溝状の落ち込み1箇所、溝1条、ピット24個、土坑2箇所を検出した。ピットの柱通りから、掘立柱建物2棟を復元できた。

SD26(第9図、図版12~14)

20~1m区で検出。現状では溝状を呈する落ち込みと推定される。底面は平坦で南北方向のレベル差はない。遺構の傾斜は、東側がなだらかで西側が急に直気味に落ちる。幅6.7m、深さ0.4~0.6mを測る。試掘第11トレンチはSD26の内部に包摂されている。埋土は基本層序で第5層にあたり、A~C層の3層に区分された(第5図)。A層は2.5Y5/3黄褐色シルト、B層は10YR5/4にぶい黄褐色細礫・粘土質シルト、C層は10YR5/3にぶい黄褐色中~細礫混じりシルトで第8層(地山層)のブロックを含む層であった。出土遺物は特にB層の遺構東肩に集中している(図版14)。須恵器壺(第23図59~63)・平瓶(第23図63)が認められた。SD26は出土土器の年代観から飛鳥時代後期の所産と考えられる。

掘立柱建物1(第13図、図版15)

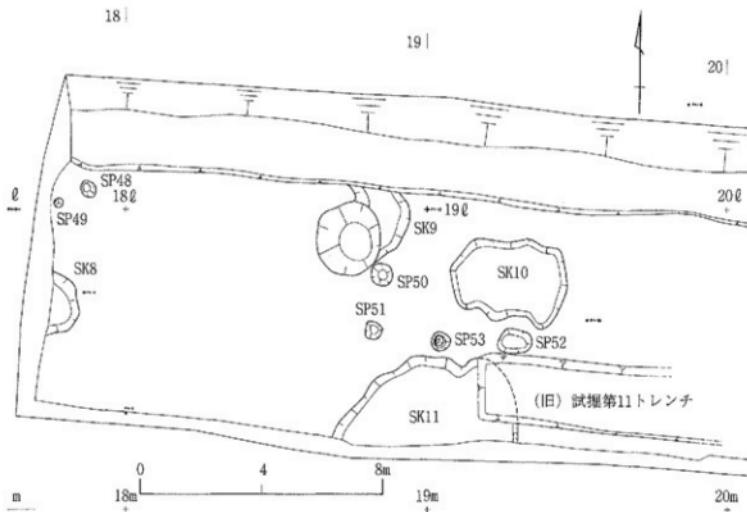
1m区で検出。SP9・10・11の方形の大型ピットで構成。東西1間、南北1間分を検出。柱間は東西・南北とも2.0mを測る。軸は国家座標系に乗る。出土遺物と検出面から古墳時代の所産と考えられる。

掘立柱建物2(第15図、図版16)

19~20m区で検出。SP17・19~22の円形ピットで構成。東西1間、南北2間分を検出。柱間は東西・南北とも1.15mを測る。軸は国家座標系より西へ25°振る。出土遺物から平安時代の所産と推定される。

土坑(第19図)

SK2・3とも19m区で検出。いずれも無遺物だが、検出面から平安時代の所産と推定される。



第16図 ②区遺構面III遺構平面図

【遺構面III】(第16図、図版17)

土坑4基、ピット6個を検出した。検出面が地山層なので、これらは古墳時代ごろの所産と推定している。

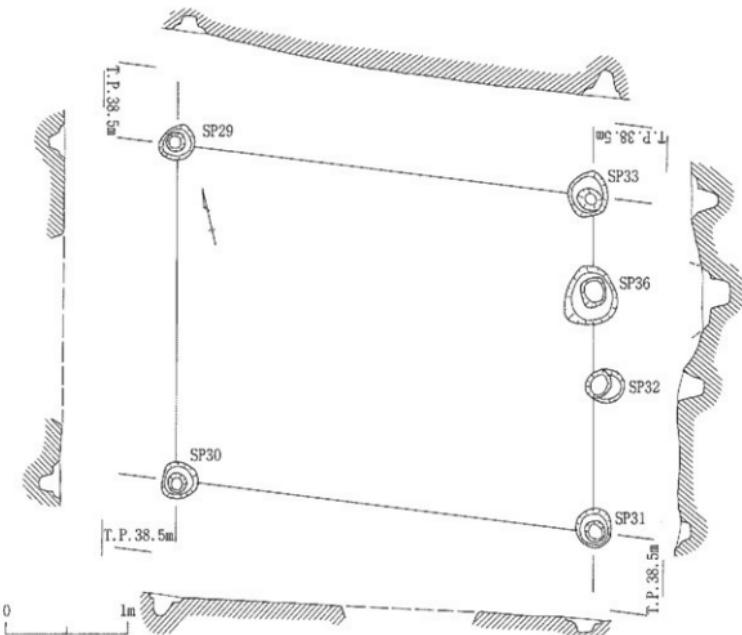
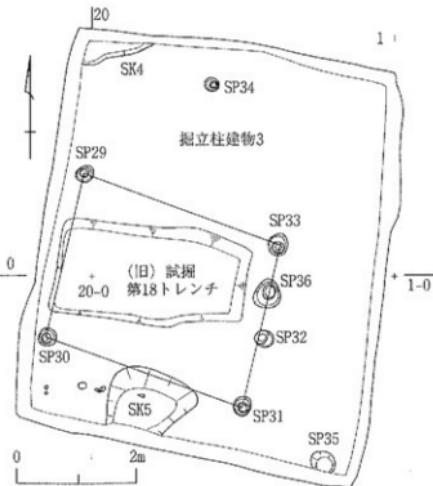
3) ③区の調査

土坑2基とピット7個を検出した。掘立柱建物1棟を復元できた。

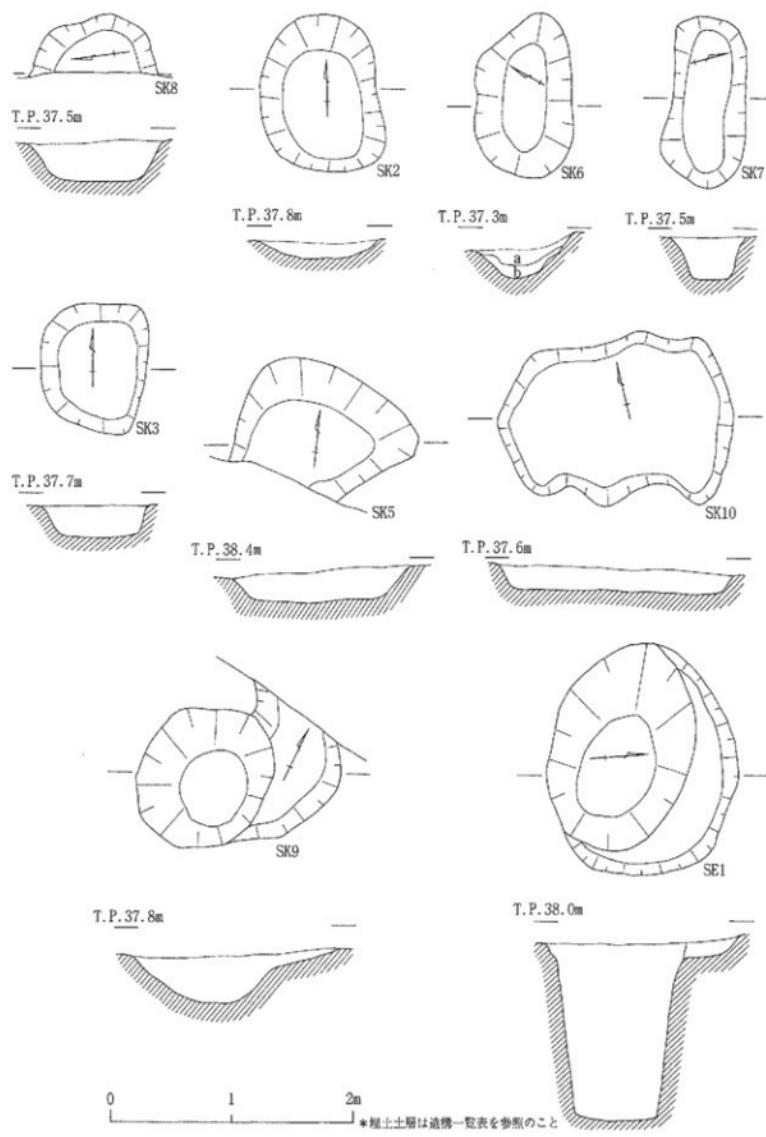
掘立柱建物3(第18図、図版19)

SP29~31、33で構成。南北は座標系より西へ14°振り、東西はその直交ラインより7°南に振る。SP29-30は2.8m、SP29-33は3.4mを測るので各間に1ないし2個の柱穴が存在すると考えられる。検出面より古墳時代または平安時代の所産と推定している。

第17図 ③区地山層上面検出遺構平面図→

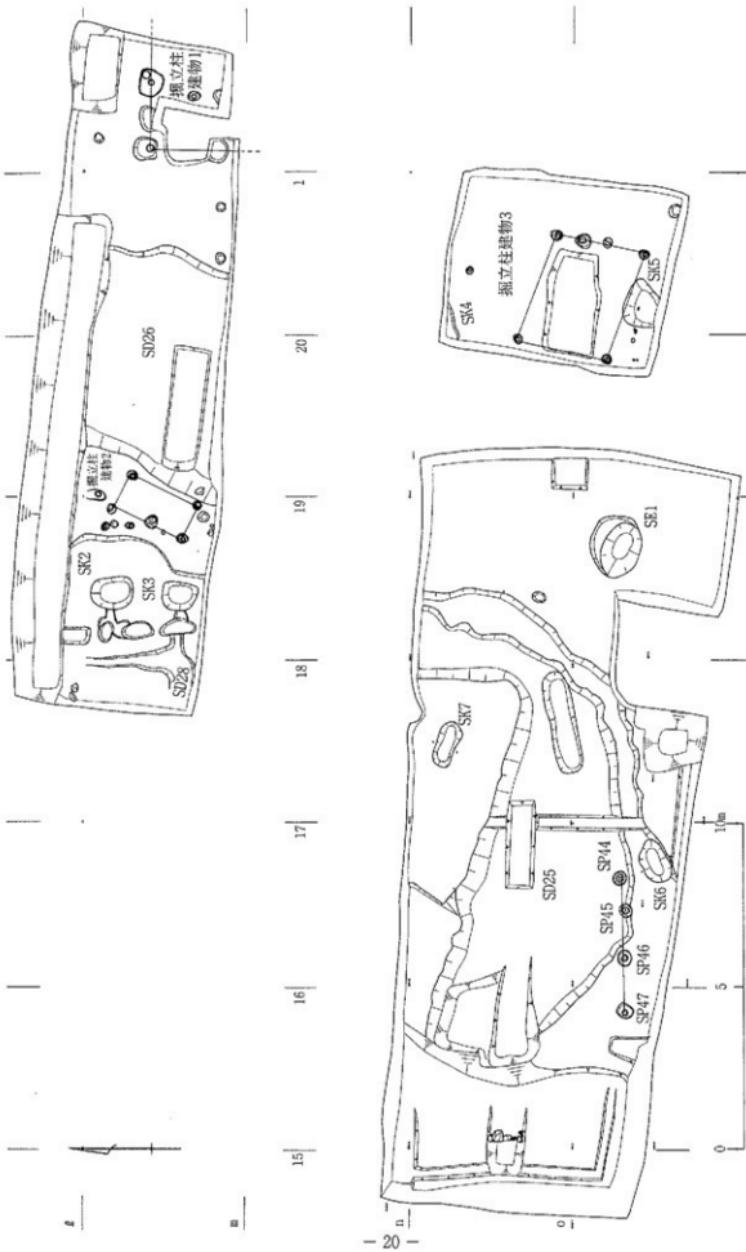


第18図 掘立柱建物3実測図



第19図 土坑・井戸平面断面集成図

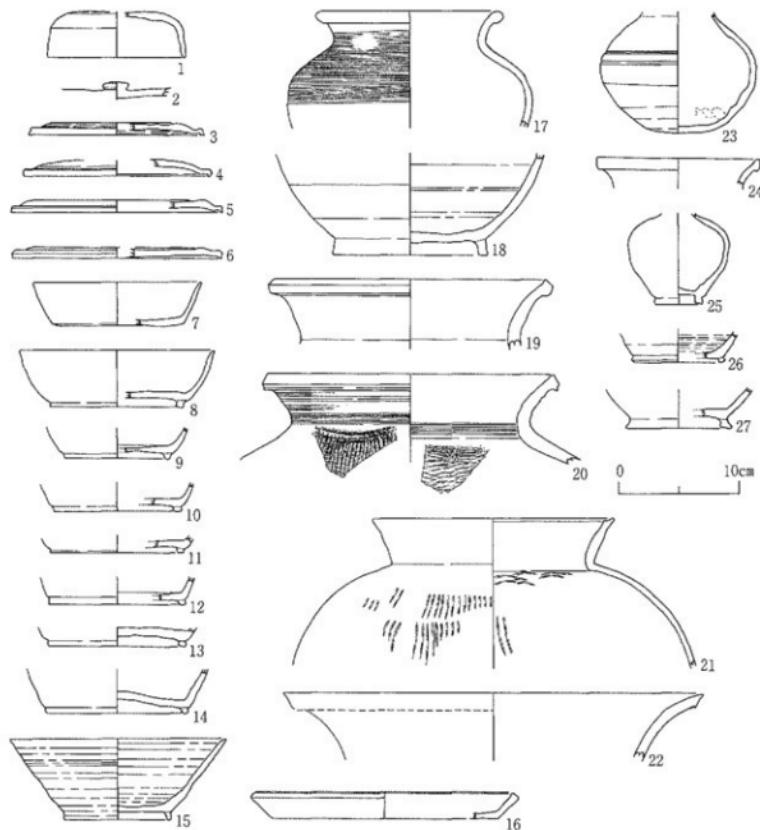
第20图 ①②③区遗物配量图



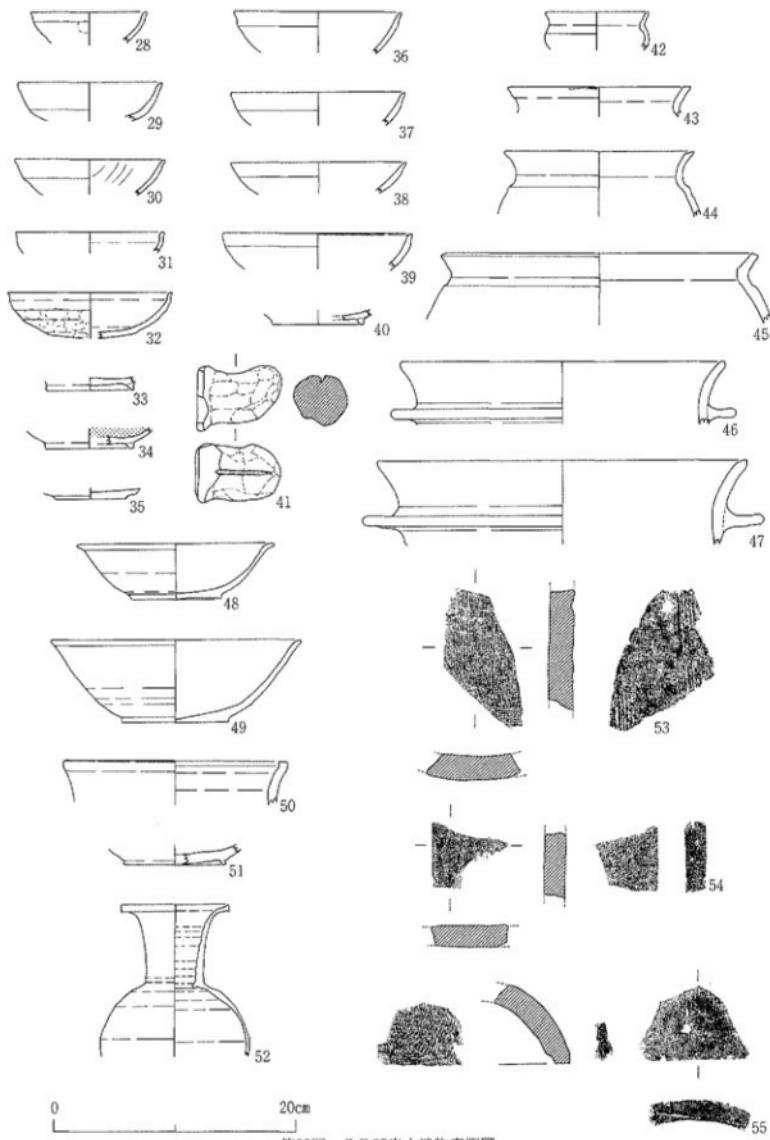
V 出土遺物

1) SD25出土遺物 (第21・22、図版20~25)

1~6は須恵器杯蓋。うち2~6はつまみをもつ。1は天井部が平らに近く、口縁部は直下に下る。外面天井部に回転ヘラケズリ、内面には乱方向のナデ調整が施される。口径11.2cm、器高3.8cm。2は扁平な擬宝珠つまみを付す。内面天井部には一定方向のナデ調整が施される。3~6は天井部を欠損する。平坦な天井部から「Z」字状にカーブを描き、口縁端部はさらに下方へ屈曲する。4・6は内面天井部に一定方向のナデ調整を施す。3は口径14.4cm、4は口径15.2cm、5・6は口径17.2cm。



第21図 S D25出土遺物実測図



7～15は須恵器杯身。7はやや平らな底部から屈曲して、口縁部は直線的に外方にひろがる。調整は外面底部に回転ヘラケズリ、見込みには乱方向のナデを施す。口径13.6cm、器高3.6cm。8～15は直立気味な「ハ」の字形にひろがる高台を伴う。8・10・14は内面見込み一定方向のナデ、11・13・15は見込みに乱方向のナデ、14・15は底部外面に一定方向のナデ調整を施す。8は外面に灰かぶりが見られる。口径15.8cm、器高4.7cm、底径10.8cm。9は底径8.6cm、10は底径10.4cm、11は外面に灰かぶりが見られる。底径10.8cm、12・13は底径11.2cm。14は底径11.4cm。15は外面口部に灰かぶりが見られる。口径17.7cm、器高6.7cm、底径8.6cm。

16は須恵器皿。平底から屈曲し口縁部は短く、外方へのびる。口縁端部は面をもち、内側がやや肥厚する。口径21.2cm、器高2.2cm、底径18.4cm。

17・18・24～27は須恵器壺。17は丸味をもつ体部から、「く」の字形に外反する口縁部。口縁端部は外側に肥厚し、丸くおさめる。調整は外面にカキメが施される。口径15.4cm。24はなだらかに外反する口縁部から、口縁端部は上下に拡張させる。口径13.4cm。18・25～27は底部。「ハ」の字形にひろがる高台をもつ。18は外面体部に回転ヘラケズリ、底部には一定方向のナデ、内面見込みに乱方向のナデ調整を施す。底径12.6cm。25は小形壺。外面底部に一定方向のナデ調整を施す。底径3.9cm。26は内外面共に回転ナデ調整を施す。底径7.8cm。27は底部内外面に一定方向のナデ調整を施す。外面に灰かぶりが見られる。底径8.6cm。

19～22は須恵器壺。19は口縁端部が断面方形に肥厚する。口径22.3cm。20は口縁端部が断面方形に肥厚し、1条の凸線がめぐる。頭部は内外面共回転によるカキメ、外面体部格子状、内面には青海波状タタキが施される。外面肩部に灰かぶりが見られる。口径23.5cm。21は丸味をもつ体部から、屈曲して外方に直線的にのびる口縁部。口縁端部は上方に凹む。調整は外面平行、内面には青海波状タタキが施される。外面に灰かぶりが見られる。口径19.8cm。22は外方に大きくひろがる口縁部、口縁端部は上下に肥厚する。口径34.4cm。

23は須恵器鉢。球形の体部をもつ。体部最大径境に2条の沈線と、底部には回転ヘラケズリ調整が施される。外面には灰かぶりが見られる。口縁部は欠損。

28～32・36～40は土師器杯。31・39は口縁端部上方に面をもつ。以外は全て口縁端部は外反する。28の口縁端部はやや肉厚。口径19.6cm。29は丸味をもちながら外方にひろがる体部から、口縁部はそのまま続く。口縁端部はやや尖り気味。口径10.7cm。30は外方にひろがる体部から、口縁部はそのまま続く。口縁端部は丸くおさめる。調整は内面に放射線状暗文、外面は風化のため詳細不明。口径12.2cm。31は口径12.2cm。32は丸味をもつ体部から、口縁部は短く立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。口径13.4cm、器高3.8cm。36～39は風化のため詳細不明。36は口径13.7cm。37は口径14.2cm。38は口径14.3cm。39は口径15.4cm。40は「ハ」の字形にひろがる高台をもつ。底径7.6cm。

33・34は黒色土器碗。共に内面にヘラミガキを施し、いぶされている。B類。33・34は底径7.2cm。35は綠釉陶器碗。円盤状の高台がつく。底径5.8cm。

41は土師器の把手。断面は円形を呈し、上方に1条の溝を施す。ユビ調整の痕が明瞭に見られる。

42は土師器小形壺。丸味をもつ体部から、口縁部は「く」の字形に外反する。口縁端部は丸くおさめる。調整は風化のため詳細不明。口径8.3cm

43～45は土師器壺。いずれも「く」の字形に外反する口縁部から、口縁端部は上方に面をもつ。調整は風化のため詳細不明。43は口径15.0cm。44は口径15.4cm。45は口径25.2cm。

46・47は土師器羽釜。体部から口縁部にかけて、なだらかに外弯する。口縁部直下に断面U字形の鈸が水平に付く。46は口径26.4cm、47は口径30.2cm。

48~51は縁彫陶器。48・49・51は碗。円盤状の高台から、丸味をもちながら外方に広がる体部から、口縁部は屈曲して外折する。48は口径16.2cm、器高4.6cm、底径7.2cm。49は口径20.6cm、器高6.8cm、底径8.8cm。51は底径8.0cm。50は蓋。直立する口縁部から、口縁端部は上方に面をもち、内側に肥厚する。口径18.4cm。

52は灰釉陶器壺。球形の体部から、屈曲してやや広がり気味の長い頸部をもつ。口縁部は外反し、口縁端部は面をもち、上下に拡張する。口径8.6cm。

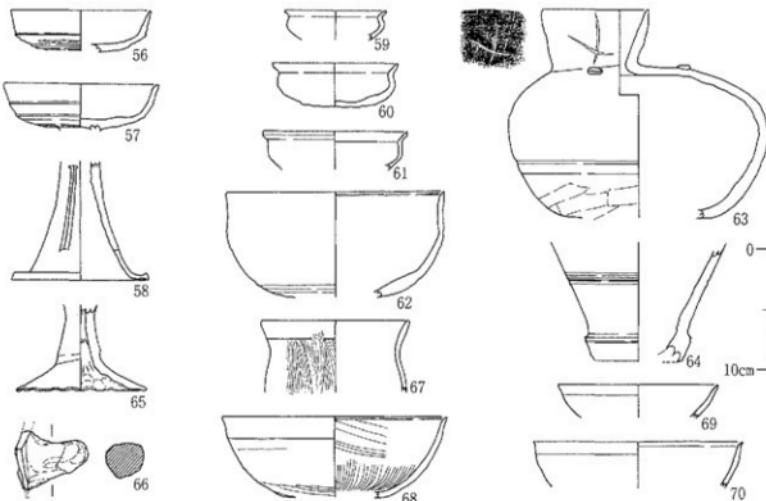
53~55は瓦。53・54は平瓦。凹面に布目痕、凸面には平行縦目タタキがみられる。55は丸瓦。凹面には布目痕、凸面には工具によるナデ調整がみられる。

2) SD26出土遺物（第23図、図版25~27）

56~58は須恵器高杯。56・57は口縁部が直線的に外反し、外面に凸線がめぐる。底部には回転ヘラケズリ調整が施される。56は口径11.4cm。57は内面見込みに一定方向のナデ調整を施し、底部には3方向の透かし窓の痕が見られる。口径11.6cm。58はラッパ状にひらく脚柱部から、裾部はさらにひらき、裾端部に面をもつ。脚柱部には3方向からなる長方形の透かし窓をもつ。裾径11.3cm。57の脚部とも考えられる。

59~61は須恵器杯。扁平な体部から、「く」の字形に外反する口縁部。回転ナデ調整を施す。59は口径8.4cm。60は外面底部未調整でおわる。口径10.2cm。61は口径10.8cm。

62は須恵器鉢。丸味をもつ深い底体部から、口縁部は直線的に上方にのびる。口縁端部は内側に段をもつ。調整は外面底部に回転ヘラケズリ、内面見込みには乱方向のナデを施す。口径17.8cm。



第23図 SD26出土遺物実測図

63は須恵器平瓶。平たい球形の体部に、その頂部からはずれた位置に筒形の口頭部がつく。肩部にはボタン状の突起が2箇所、外面口頭部には「×」印の線刻がみられる。調整は外面底部に手持ちヘラケズリが施される。外面には灰かぶりがみられる。口径8.6cm。

64は須恵器鉢。直線的に外方に開く体部をもち、底部は欠損。外面体部中央部に2条の沈線を施す。

65は土師器高杯。裾部をユビ調整、脚柱部にはシボリメがみられる。裾径10.6cm。

66は土師器把手。鉢の把手であろう。全体をユビ調整で施し、断面円形をなす。

67は土師器甕。なだらかに外反する口縁部から、口縁端部は丸くおさめる。外面体部にはハケメ調整を施す。口径12.0cm。

68~70は土師器杯。68はやや深みをもつ体部から、外方に広がる口縁部。口縁端部は内面に段をもつ。調整は内面に2段からなる放射状暗文、外面には粗いヘラミガキとヘラケズリが施される。口径18.4cm。
69・70は共に風化のため詳細不明。69は口径11.0cm。
70は口径17.1cm。

3) 第2・3・4・6層出土遺物(第24~27図)

第24図は須恵器高杯。長脚2段透かし窓をもつともわれる。透かし窓は方形。裾径10.4cm。第2層出土。

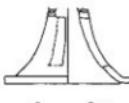
第25図は土師器甕。丸味をもつ体底部から、わずかに外方に開く口縁部。口径8.7cm。第3層出土。

第26図は土師器把手と甕。把手は幅広の扁平な断面をもち、丁寧なナギ上げ調整が施される。甕はなだらかに「く」の字形に外反する口縁部から、口縁端部は面をもつ。口径23.0cm。第4層出土。

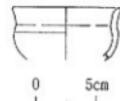
第27図は須恵器杯蓋。口体部境に沈線によって浮かび上がらせたという形散化した稜がみられる。口径11.8cm。第6層出土。

4) 石製品

遺物は紙面の都合上掲載できなかったので、表・グラフを使い述べることにする。出土数31点、総重量402.63gの石製品が出土した。うち磨製を1点含む。①区 S D25内から出土したものが多い。製品としては不定形削器・模型石器・砥石があるのみで、ほかは剥片である。S 13は不定形削器で片面調整を施すが、一片を欠損する。7.99g。①区・旧17トレンチ出土。S 16も不定形削器であるが著しい風化のため詳細不明。22.65g。②区第2・4層出土。S 17は模型石器としたが定かではない。著しい風化のため詳細不明。13.11g。②-19m・第6層内出土。S 31は砥石で全面砥面とするが著しい風化のため詳細不明。165.69g。①-17p・S D25出土。剥片については原面が見られること、5g以下の石くずのような剥片が出土したことから、この地で石製品を製作していたのではないか、また、所属時期はおおむね弥生時代ということが考えられる。



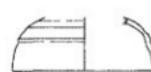
第24図 第2層出土遺物実測図



第25図 第3層出土遺物実測図

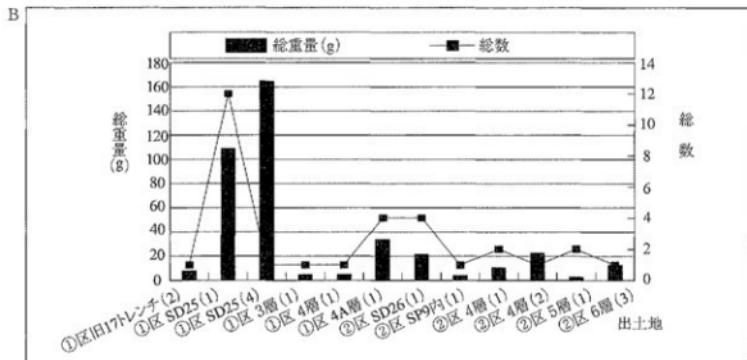


第26図 第4層出土遺物実測図



第27図 第6層出土遺物実測図

出土地	総重量(g)	総数	出土地	総重量(g)	総数
①区旧17トレンチ(2)	7.99	1	①区 SD25(計)	7.99	1
①区 SD25(1)	109.19	12	①区 SD25(計)	274.88	13
①区 SD25(4)	165.69	1	①区 3層(計)	4.74	1
①区 3層(1)	4.74	1	①区 4層(計)	5.17	1
①区 4層(1)	5.17	1	①区 4A層(層)	34.11	4
①区 4A層(1)	34.11	4	②区 SD26(計)	21.90	4
②区 SD26(1)	21.90	4	②区 SP9内(計)	4.33	1
②区 SP9内(1)	4.33	1	②区 4層(計)	33.52	3
②区 4層(1)	10.87	2	②区 5層(計)	2.88	2
②区 4層(2)	22.65	1	②区 6層(計)	13.11	1
②区 5層(1)	2.88	2	総計	402.63	31
②区 6層(3)	13.11	1	*(1)剥片(2)不定形削器(3)楔(4)磨製石器		



第1表 出土地における個体数と重量の関係A・B

No.	地区	遺構	出土年月日	重 量	種類	呼称
S1	①-17P	SD25-2層(上)	20000714	4.88g	剥片	根頭剥片。若しい風化。
S2	①-SD25アゼC	SD25-1A層	20000727	1.58g	剥片	右方に斜坡。若しい風化。
S3	④-19-0	SD25-1層	20000713	21.91g	剥片	3列に削面。原石からの剥石。若しい風化。
S4	①-17-P	SD25-2層(下)	20000725	42.41g	剥片	若しい風化。
S5	①-19-0	SD25-1層(AB層相接)	20000725	28.24g	剥片	2列に削面。原石からの剥石。若しい風化。
S6	①-17-0-P	SD25-2層(上)	20000714	2.42g	剥片	1列に削面。若しい風化。
S7	①-18-0-P	SD25-2層(中～下)	20000718	0.88g	剥片	若しい風化。
S8	①-17-0-P	SD25-2層(上)	20000715	2.29g	剥片	若しい風化。
S9	①-17-0	SD25-2層(下)	20000725	2.15g	剥片	若しい風化。
S10	①-18-0-P	SD25-2層(中)	20000715	0.99g	剥片	若しい風化。
S11	①-17-0-P	SD25-2層(上)	20000715	0.45g	剥片	若しい風化。
S12	①-SD25アゼC	SD25-2層	20000728	1.03g	剥片	若しい風化。
S13	①区 旧17トレンチ		20000703	7.99g	不定形削器	複数剥片。1辺欠損。片面研磨。若しい風化。
S14	②区-2	第4層	20000701	9.88g	剥片	根頭剥片。一部に原石。若しい風化。
S15	(1)	第5層 稲臺中	20000703	5.17g	剥片	1列に削面。若しい風化。
S16	②区-2	第4層	20000701	22.65g	不定形削器	複数剥片。若しい風化。
S17	②-19m	第6層内	20000731	13.11g	地形石盤?	複数剥片。若しい風化。
S18	①-19-0	第4A層	20000710	14.41g	剥片	根頭剥片。一面に原石。若しい風化。
S19	②-20m	SD26	20000715	17.44g	剥片	根頭剥片。若しい風化。
S20	①-17P	第4A層	20000707	12.63g	剥片	根頭剥片。若しい風化。
S21	①-17P	第4A層	20000707	4.38g	剥片	根頭剥片。1辺に原石。若しい風化。
S22	②-2e	SP9内	20000801	4.33g	剥片	根頭剥片。1辺に原石。若しい風化。
S23	①区 旧18トレンチ南	第3層 下層	20000704	4.74g	剥片	根頭剥片。若しい風化。
S24	②-20m	SD26	20000718	2.92g	剥片	若しい風化。
S25	②区-2	第4層	20000701	0.99g	剥片	若しい風化。
S26	①-17-0	第4A層	20000708	2.59g	剥片	若しい風化。
S27	②-19m	第5層内	20000711	1.10g	剥片	若しい風化。
S28	②-19m	第5層内	20000711	1.78g	剥片	若しい風化。
S29	②-20m	SD26	20000718	1.37g	剥片	若しい風化。
S30	②-20m	SD26	20000718	0.17g	剥片	第1の風化。
S31	①-17-P	SD25-2層(下)	20000725	165.69g	原石	4面研磨。若しい風化。

第2表 石器観察表

V まとめと課題

第26次調査地は、現在の神並遺跡の東南部にあたり、これまで調査事例が乏しい地域であったために、從前の調査成果に新たな知見を付け加えることになった。ここでは、調査の当該年度報告という本書の性格から、今回明らかになった遺構・遺物の様相に対し補足説明を加えながら、いくつかの問題点を提示しそれに若干の予察を述べることでまとめて代え、今後の調査課題を呈示しておきたい。

1) 神並遺跡第26次調査検出遺構の時期別変遷

弥生時代後期

ごく微量であるが、SD25内から第V様式の弥生土器壺の底部や壺の口縁部が出土している(図版28)。このことは、SD25の前身河川が当該期に流下したことが推定できる。また、第14次調査B-1地区検出の河道の埋積層で弥生時代後期の土器片が少量出土していると報告¹されていることから、SD25の前身河川が第14次調査検出河道の分流に相当することが推測できよう。

古墳時代

明確に当該期の所産と考えられる遺構を抽出することは出土遺物が僅少のため困難だが、②区遺構面II東端の掘立柱建物1号遺構面Ⅲの土坑・ピット群がこの時期に該当する可能性が高い。從前の調査で主に「石切参道」より西側で中期の掘立柱建物や溝、土坑が検出されてきた²。東側では第13次調査SD31に中期末～後期初頭の土師器・須恵器や鍛冶関連遺物が発見されているのが目立つ程度であった。第26次調査では時期の細分は不明ながら、当該期の集落が遺跡の南東端近くまで続いていることが確認された。

飛鳥時代

飛鳥時代の遺構として、SD26がある。遺構面精査の当初、SD25に接続することが予想されたが、出土遺物の年代観や流向などの検討から、現状では別個の遺構として取扱うこととした。第26次調査の北側と西側に位置する第14次調査では、6世紀末～7世紀初頭の遺構として、溝・豎穴住居・柱穴群が検出されているが、SD26は時期的にそれらの遺構に後続するものと考えられる。ただし、今回はSD26以外に当該期の明確な遺構は確認できなかった。なお、上記の根拠となる出土土器群の年代観については後述する。

平安時代前期

当該期の遺構として、SD25が挙げられる。SD25は前記のとおり、弥生時代後期ごろに流下した前身河川が徐々に埋没した過程において凹地状の地形が残存し、そこに拳大の礫とともに該期の遺物が埋積したものである。出土土器群は平安時代前期の一括資料と見えられ、神並遺跡として初めての検出例である。出土遺物はSD25の②A層上面で多く認められ、南東から北西へ遺物が列をなす状態がみられた。このことは、第26次調査地の南東方向に該期集落の中核部が存在することを示すと考えられる。「層位」で記したように、現況の地表面は後世の開墾作業や旧住宅建設工事により遺構面は大きく損なわれており、今回の調査地の東側、北側では遺構の残存は期待できないが、南側には新たに該期集落関係の遺構が発見される可能性が指摘できる。その場合、位置関係から該期の集落を從前のまま「神並遺跡」と捉えられるか、という問題が発生しよう。新遺跡の認定を含めたこれらの課題の解決は、今後の調査進展に俟つべきと考えられる。

平安時代中期以降

遺構面が滅失しているため不確実であるが、今回の調査成果をみる限り、当該地で平安時代中期以降、集落の营造は認められない。SD25が完全に埋積するのは、最上部で出土した瓦器塊から中世期ごろに指定できる。また、鍛溝が遺存することにより、第26次調査地は中世期以降、畑地として利用されていたこととみられる。

2) 第26次調査出土遺物の位置付けについて

① SD26出土土器について

SD26には、古墳時代後期末から飛鳥時代後後にかけてのものが含まれている。これらについて予察を述べてみたい。SD26出土土器のうち、目を引くのは楕形を呈する須恵器の一群である(本書第23図59~61)。「V 出土遺物」の項では、従前の分類³に従い「須恵器杯」と報告した。扁平な底部から体部で内彎して屈曲し、口縁部で強く短く外反する。口縁部の先端は、丸く終わるものと僅かに込み上げて内端で面をもつものの2種が見られる。回転ナデ調整で仕上げられる。胎土は緻密で極めて精良である。外面とも乳白色から灰白色を呈する。口径は8.4~10.8cmを測る。これら「小型楕」とも称すべき土器群は実は今回が初例ではない。第2次調査検出自然河川の堆積層から出土していることが既に報告されている⁴。年代観は、伴出土器群との整合性から古墳時代~奈良時代としている。実測図から口径は9.4~11.5cmで形態・法量とも近似する。

小型楕形須恵器の検出例を探ろう。飛鳥石神遺跡第4次調査検出井戸SE800で口縁部外反の須恵器杯が出土している⁵。体部は外上方に広がり、口縁部の屈曲は弱く内彎気味に立ち上がるものである。実測図から口径は10.4cmを測る。井戸SE800出土土器では、このほか須恵器平瓶(註4文献No17)や土師器杯C(註4文献No 5)が併出している。須恵器平瓶は扁球状の体部を持ち、体部上面の中心から外して漏斗状の口縁部が接続する。体部最大径は実測図から14.4cmで、SD26出土平瓶(本書第23図63)より小振りであるが、体部の形状は相似する。土師器杯Cは詳説を避けるが、形態と成形の特徴がSD26出土杯(本書第23図68)と近似する。これらのことから、SD26出土土器群の一部について、石神遺跡井戸SE800出土土器と同時期に近いものが含まれているとの見通しを持つことができる。石神遺跡井戸SE800は飛鳥Ⅲの段階で廃絶することが報告されていた⁶が、近年見直しが行われ飛鳥Ⅲで廃絶、飛鳥Ⅳで破壊されたと修訂されている⁷。従って、SD26出土土器群には、およそ7世紀後半代の土器を包摂するものがあると推定できる。また、陶邑高歲寺41号窯(TK41)にも口縁部外反の須恵器杯が見られる⁸。小森俊寛氏は註3文献で陶邑諸窯出土須恵器を6群に分類され、TK41号窯出土例をI-b群に位置付けられている⁹。I-b群は7世紀前半代に比定されている。これは生産地である窯址資料の年代観であり、消費地の都城・集落のそれに先行しても矛盾しないと考えられる。

以上をまとめると、SD26出土土器群には、長脚2段透かしの須恵器高杯(第23図56~58)など6世紀末に位置付けられる土器群¹⁰の一方で、7世紀後半代の土器群が含まれることが明らかとなった。後者の土器群はそのままSD26の廃絶期にかかり、該期に埋没したものと推定できよう。

② SD25出土土器について

SD25には、弥生時代後期から平安時代前期にかけての遺物が含まれている。弥生時代後期・古墳時代後期の遺物はSD25(自然河川)の初源期を探る上では重要であるが、二次堆積の混入品と思われここでは捨象し、平安時代前期の土器群に絞って考察したい。まず、土器の接合状態から見てみることにする。SD25の堆積層は「遺構」の節で記したように、大きく①層と②~⑤層の2層に区分されるが、例えば、須恵器杯(第21図7)は①層とその上面の第4A層との接合資料である。同様に須恵器皿(同16)は②層下位面と①層下位面との接合資料、須恵器甌(同23)に至っては、第4A層・①層・②層中位面との接合資料で、土器の上から①層・②層の堆積時期の差を認めることはできない。

次に施釉陶器の位置付けを探ってみたい。因みにこれらは試掘調査出土遺物であるが、前述のとおり出土位置や断面の検討からSD25の②層内出土相当資料と見做し得る。第22図48・49は綠釉陶器碗で、削り出しによる円盤状高台を持つ。48は僅かに底面中央が上方へ凹み、口縁部の外折は強い。軟質の焼成である。これら形態上の特徴から時期的には、平安京右京三条三坊五町SD19出土例¹¹の段階(平安京I新

段階¹²、9世紀中葉)に相当すると考えられる。灰釉陶器長頸壺(第22図52)は肩部の張りが小さい卵形の体部から、頭部は直線的に開いて口縁部で大きく外反し広がる。頭部内面にはロクロ目が残る。大業平安時代前期の所産と推定される。以上の施釉陶器の年代観は、帰納的ながら、SD25出土の土師器・須恵器のそれと基本的に齟齬せず、該期の一括資料と見做して差し支えないと考えている。SD25出土土器について、器種ごとにその破片数の比率を下表に掲げた。このうち、「その他」は弥生土器などを指す。また土師器・須恵器には古墳時代に属する資料が含まれている。このため、下表は土器器種の出土傾向の概略を示すものである。これによると施釉陶器は全破片数の4.1%を占めることになる。これは従前の神並遺跡の調査例に比して相対的に高い値であり、出土遺物の上からも今回の調査成果の特殊性を窺うことができよう。

	土師器	黒色土器	須恵器	縁釉陶器	灰釉陶器	合計	その他
破片数	1372	65	587	50	15	2089	14
比率	65.7%	3.1%	28.1%	2.4%	0.7%	100%	

第3表 SD25出土土器の破片数比率

3) 今後の課題

今回の調査成果について遺構・遺物の両面から若干の予察を述べてきた。平安時代前期の集落は、神並遺跡では今まで未検出であり、新たな知見を加えることができた。平安時代中期・10世紀の集落は第11次調査地で確認されているが、直前の8世紀末～9世紀初頭の集落はまだ発見されておらず、その追及が今後の課題となろう。また、SD25の遺物出土状況から、今回の調査地の南東側で該期の集落が発見される可能性があり、その場合、「石切参道」を中心とした従来の遺跡範囲で捉えられるか疑問が残る。新遺跡の認定と併せ、今後の調査進展が大いに期待される。

¹ (財)東大阪市文化財協会『神並遺跡Ⅳ』、1996年。p90。

² 大阪府教育委員会『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査概要Ⅰ』、1984年。

³ 古代の土器研究会編『古代の土器』都城の土器集成』1992年。同編『古代の土器5 7世紀の土器』1997～98年。なお、今回報告の土器記述にあたっては、同上文献に全面的に依拠している。

⁴ 東大阪市教育委員会・(財)東大阪市文化財協会『神並遺跡Ⅱ』、1987年。p11、第9図自然河川内出土土器実測図、No2～4。

⁵ 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮発掘調査部『飛鳥・藤原宮発掘調査概報15』、1985年。p65、第29図井戸SE800出土土器、No14。

⁶ 訂5文献。

⁷ 奈良国立文化財研究所『奈良國立文化財研究所年報1997-1』、1997年。なお、相原嘉之「大和・都城」(註3文献、『古代の土器5-1 7世紀の土器(近畿東部・東海編)』、1997年。)の解説文を参照のこと。

⁸ 大阪府教育委員会『陶邑V』[大阪府文化財調査報告書第33報]、1982年、図版第35、No32および図版第96、No15。同書では「高坏」と報告されている。

⁹ 小森俊寛『陶邑』(註3文献、『古代の土器5-2 7世紀の土器(近畿西部編)』、1998年。

¹⁰ 田辺編年(平安学園考古学クラブ『陶邑古窯址群Ⅰ』、1966年。)では、TK209型式併行期に位置付けられると考えられる。

¹¹ (財)京都市振興文化財研究所『平安京右京三条三坊』、1990年。

¹² 模式の類別や年観は、泉拓良編『白河白壁北辺の遺跡』(京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ)、1981年。及び註3文献に依拠した。

第4表 造構一覧表（規模の単位は全てcm）

造構名	大地図	小地図	地図面	平野相	低湿	稍湿	湿合	概 土	出土物	備 考
SP1 ②	20m	I	円形	12	12	5	5t4/1暗青灰色粘粒砂			
SP2 ②	19m	I	円形	20	18	22	SD05の層上に5t4/1暗青灰色粘粒砂が混入			
SP3 ②	19m	I	円形	10	10	9	SD06の層土に5t4/1暗青灰色粘粒砂が混入			
SP4 ②	19m	I	円形	32	30	28	5t4/2灰オリーブ色粘粒泥じり粘粒砂シルト			
SP5 ②	19m	I	円形	8	8	11	5t4/1暗青灰色粘粒砂			
SP6 ②	19m	I	楕円形	30	25	29	10t25/4にぶい黄褐色糊凝泥じりシルトに5t4/2灰オリーブ色シルトがブロック状に混入	土陣器・痕跡器		
SP7 ②	19m	I	楕円形	30	24	18	10t25/4にぶい黄褐色糊凝泥じりシルトに5t4/2灰オリーブ色シルトがブロック状に混入	土陣器		
SP8 ②	20m	I	楕円形	30	27	17	10t25/4にぶい黄褐色糊凝泥じりシルトに5t4/2灰オリーブ色シルトがブロック状に混入			
SP9 ③	2m	II	第九方形	85	76	18	〔柱形〕〔茎部〕〔地山層〕に7.5t/m ² の灰オリーブ色粘粒泥じり中粒砂がブロック状に混入、 <u>灰中粒混じる</u> 。〔柱根部〕X3/6灰黑色シルト質粘粒砂			
SP10 ③	2m	II	第九方形	70	70	38	〔柱形〕〔茎部〕〔地山層〕に7.5t/m ² の灰オリーブ色粘粒泥じり中粒砂がブロック状に混入、 <u>灰中粒混じる</u> 。〔柱根部〕7.3t/m ² の灰オリーブ色粘粒泥中粒砂	土陣器・痕跡器		
SP11 ③	2m	II	第九方形	75+	60+	29	5t4/8層〔地山層〕に2.3t/m ² の黄褐色土質シルトがブロック状に混入	土陣器		
SP12 ②	2m	II	不定形	45+	26+	21	第8層〔地山層〕に10t4/2オリーブ色シルト質粘粒砂〔種類を含む〕がブロック状に混入			
SP13 ②	2m	II	円形	32	32	19	5t4/1暗オリーブ色シルト質粘粒砂〔中粒を少含む〕			
SP14 ②	1m	II	円形	30	28	13	第8層〔地山層〕に2.3t/m ² の灰黑色シルト質粘土〔種類を少含む〕がブロック状に混入			
SP15 ②	1m	II	円形	35	35	16	5t4/1暗オリーブ色シルト質粘粒砂〔中粒を少含む〕と2.3t/m ² にぶい黄褐色の混合土			
SP17 ②	20m	II	円形	35	36	24	10t25/4にぶい黄褐色シルト質粘砂と10t25/3にぶい黄褐色土質シルトと2.5t/m ² の灰黄色糊凝泥の混合土			
SP18 ②	20m	II	楕円形	62-	35	15	5t4/5オリーブ色粘粒砂～糊凝泥じり粘土質シルト			
SP19 ②	19~20m	II	円形	32	27	25	5t4/5オリーブ色粘粒砂～糊凝泥じり粘土質シルト	土陣器		
SP20 ②	19m	II	楕円形	42	35	19	10t25/4にぶい黄褐色シルト質粘砂と10t25/3にぶい黄褐色土質シルトと2.6t/m ² の灰黄色糊凝泥の混合土〔合む〕			
SP21 ②	19m	II	円形	36	33	28	10t25/4にぶい黄褐色シルト質粘砂と10t25/3にぶい黄褐色土質シルトと2.5t/m ² の灰黄色糊凝泥の混合土	土陣器		
SP22 ⑦	19m	II	円形	28	28	24	7.5t/m ² の4号色糊凝泥じりシルト			
SP23 ②	19m	II	楕円形	100	54	13	5t4/1灰褐色粘粒砂と5t4/1暗オリーブ灰褐色土質粘粒砂と10t24/4号色中粒の混合土			
SP24 ②	19m	II	楕円形	65	44	8	5t4/1灰褐色粘粒砂と5t4/1暗オリーブ灰褐色粘粒砂と10t24/4号色中粒の混合土			
SP25 ② 2~n	19m	II	第九方形	85-	55	14	5t4/1灰褐色粘粒砂と5t4/1暗オリーブ灰褐色土質粘粒砂と10t24/4号色中粒の混合土			
SP26 ②	19m	II	不定形	-	-	7	SP23の種土と10t25/5にぶい黄褐色シルト質粘粒砂の混合土			
SP28 ⑤	20m	II	円形	30	28	13	5t4/4オリーブ色糊凝砂～糊凝泥じり粘土質シルト			
SP29 ②	20m	II	円形	36	30	17	5t4/4オリーブ色糊凝砂～糊凝泥じり粘土質シルト			
SP31 ②	1p	II	円形	32	28	8	5t4/4オリーブ色糊凝砂～糊凝泥じり粘土質シルト			
SP32 ②	1p	II	円形	32	28	22	第8層〔地山層〕に2.5t/m ² の灰黑色粘粒砂がブロック状に混入			
SP33 ②	1o	II	円形	38	32	23	5t4/4オリーブ色糊凝砂～糊凝泥じり粘土質シルト			
SP34 ②	1o	II	円形	25	23	13	5t4/4オリーブ色糊凝砂～糊凝泥じり粘土質シルト			
SP35 ②	1p	II	円形	45	35-	14	第8層〔地山層〕に5t4/4オリーブ色粘土質シルトがブロック状に混入			

遺構名	大地区	小地区	遺構番	平面形態	長辺	短辺	深さ	柱 土	出土遺物	備考
SP36	⑤	1p	II	楕円形	50	44	23	SY5/4オリーブ色細面混じり粘土質粘土		
SP37	②	1m	II	楕円形	28	24	12	10Y5/2オリーブ色粘土質粘土シルト質粘土と第8層(地山層)の混合土		
SP38	②	1m	II	円形	24	22	14	10Y6/4にぶい黄褐色シルト質粘土と10Y5/2オリーブ色シルト質粘土	土削器	
SP39	③	1m	II	楕円形	28	20	11	SY5/4オリーブ色粗粒砂~細面混じり粘土質シルト		
SP40	②	1m	II	円形	38	34	32	10Y5/4暗褐色土質シルト(中~細粒含む)		
SP41	②	2m	II	楕円形	80	40+	23	第8層(地山層)に7.5Y4/3暗オリーブ色細面混じり中粒砂をブロック状に含む		
SP42	②	2m	II	楕円形	40	30	14	10Y5/2オリーブ色シルト質粘土(中層を中含む)がブロック状に混入		
SP43	①	1m	II	楕円形	43	32	14	第8層(地山層)に5Y6/3オリーブ色シルト質粘土(細粒多く含む)に地山層がワック状に含む		
SP44	①	17p	II	円形	45	45	35	10Y5/2灰黃褐色シルト質粘土		
SP45	①	17p	II	円形	43	38	33	10Y5/2灰黃褐色シルト質粘土(細粒少量含む)		
SP46	①	17p	II	円形	50	43	21	10Y5/2灰黃褐色シルト質粘土(細粒中量含む)		
SP47	①	18p	II	円形	50	44	23	10Y5/2灰黃褐色シルト質粘土(細粒多量に含む)		
SP48	⑦	18i	II	円形	50	25	22	10Y5/1紺灰色粘土質粘土		
SP49	②	18i	II	円形	15	15	18	10Y5/1紺灰色粘土質粘土		
SP50	⑦	19m	III	円形	36	35	21	第8層(地山層)に2.5Y4/2暗灰黄色粘土質シルトがブロック状に混入		
SP51	②	19m	III	円形	32	30	23	第8層(地山層)に2.5Y4/2暗灰黄色粘土質シルトがブロック状に混入		
SP52	②	20m	III	楕円形	58	40	18	第8層(地山層)に2.5Y4/2暗灰黄色粘土質シルトがブロック状に混入		
SP53	②	20m	III	円形	32	32	26	第8層(地山層)に2.5Y4/2暗灰黄色粘土質シルトがブロック状に混入		
SP54	②	19n	II	深角円形	113	50	13	SY4/1灰褐色細砂とSY4/1暗オリーブ色粘土質粘土と10Y6/4褐色中層の混合土		
SK2	②	19n	II	楕円形	130	100	18	SY4/2灰オリーブ色シルト質粘土		第19回
SK3	③	19n	II	圓丸方型	105	86	20	第8層(地山層)と10Y5/4にぶい黄褐色シルト質粘土(細粒含む)がブロック状に混入		第19回
SK4	③	1o	II	不定形	105+	40+	15	第8層(地山層)にSY5/4オリーブ色粘土質シルト(細粒含む)がブロック状に混入		
SK5	⑤	1p	II	不定形	145+	100+	27	SY5/4オリーブ色中~細面混じりシルト質粘土		第19回
SK6	①	17p	II	楕円形	138	78	31	a. 10Y5/3にぶい黄褐色シルト質粘土(細粒中量含む) b. 10Y6/3にぶい黄褐色シルト質粘土に第8層(地山層)がブロック状に少含む		第19回
SK7	①	18o	II	真直円形	143	60	42	10Y4/1暗灰色細面混じりシルト質粘土に地山層がブロック状に混入		第19回
SK8	②	18a	II	円形	120+	50+	22	第8層(地山層)に2.5Y4/2暗灰黄色細面混じり粘土質シルトがブロック状に混入(細粒含む)		第19回
SK9	②	19n	II	円形・不定形	122	106	37	2.5Y4/2暗灰黄色細面混じり粘土質シルト		第19回
SK10	②	20n	II	不定形	195	132	19	2.5Y4/2暗灰黄色細面混じり粘土質シルト		第19回
SK11	②	19~20n	II	不定形	150+	300+	34	第8層(地山層)に2.5Y4/2暗灰黄色細面混じり粘土質シルトがブロック状に混入 a. 2.5Y4/3オリーブ色粘土質シルト(中~細粒含む) b. 第8層(地山層)にがブロック状に混入		
SE1	①	18p	I		190	160	152	a. 2.5Y4/3オリーブ色粘土質シルト(中~細粒含む) b. 第8層(地山層)にがブロック状に混入	土削器・黒色土器	第19回
SD1	①	18p	I		60+	20	1	SY4/4暗オリーブ色細面~粗粒砂混じりシルト質粘土	土削器	
SD2	①	18o	I		90+	16	1	SY4/4暗オリーブ色細面~粗粒砂混じりシルト質粘土		
SD3	①	18 o~p	I		30+	16	1	SY4/4暗オリーブ色細面~粗粒砂混じりシルト質粘土		

遺構名	大泊区	小泊区	測定面	平面形態	長辺	短辺	深さ	地 土	出土遺物	備 考
SD4 ①	18e	I			720+	25	3	5Y4/4暗オリーブ色細縫～粗粒砂混じりシルト質繊維砂	土師器	
SD5 ①	18p	I			210+	20	1	5Y4/6暗オリーブ色細縫～粗粒砂混じりシルト質繊維砂		
SD6 ①	18p	I			30+	14	1	5Y4/4暗オリーブ色細縫～粗粒砂混じりシルト質繊維砂		
SD7 ①	18p	I			130+	20	2	5Y4/6暗オリーブ色細縫～粗粒砂混じりシルト質繊維砂	土師器	
SD8 ①	17p	I			240+	14	1	5Y4/4暗オリーブ色細縫～粗粒砂混じりシルト質繊維砂	土師器	
SD9 ①	17p	I			230+	26	1	5Y4/6暗オリーブ色細縫～粗粒砂混じりシルト質繊維砂	土師器	
SD10 ①	17p	I			270+	20	1	5Y4/4暗オリーブ色細縫～粗粒砂混じりシルト質繊維砂	土師器	
SD11 ①	17p	I			30+	10	1	5Y4/6暗オリーブ色細縫～粗粒砂混じりシルト質繊維砂		
SD12 ①	17p	I			20+	14	1	5Y4/4暗オリーブ色細縫～粗粒砂混じりシルト質繊維砂	土師器・瓦器	
SD13 ①	17 o-p	I			130+	20	1	5Y4/6暗オリーブ色細縫～粗粒砂混じりシルト質繊維砂	土師器	
SD14 ①	17p	I			45+	24	1	5Y4/4暗オリーブ色細縫～粗粒砂混じりシルト質繊維砂	土師器	
SD15 ①	17p	I			20+	14	1	5Y4/4暗オリーブ色細縫～粗粒砂混じりシルト質繊維砂		
SD16 ①	16p	I			84+	30	4	5Y4/6暗オリーブ色細縫～粗粒砂混じりシルト質繊維砂	土師器	
SD17 ①	16p	I			110+	20	1	5Y4/4暗オリーブ色細縫～粗粒砂混じりシルト質繊維砂		
SD18 ①	16-	I			410+	50	4	5Y4/6暗オリーブ色細縫～粗粒砂混じりシルト質繊維砂		
SD19 ①	16o	I			30+	16	2	5Y4/4暗オリーブ色細縫～粗粒砂混じりシルト質繊維砂		
SD20 ①	16o	I			90+	18	1	5Y4/4暗オリーブ色細縫～粗粒砂混じりシルト質繊維砂	土師器	
SD21 ①	16o	I			130+	20	2	5Y4/6暗オリーブ色細縫～粗粒砂混じりシルト質繊維砂		
SD22 ①	17o	I			100+	16	2	5Y4/6暗オリーブ色細縫～粗粒砂混じりシルト質繊維砂	土師器	
SD23 ①	17o	I			100+	18	1	5Y4/4暗オリーブ色細縫～粗粒砂混じりシルト質繊維砂		
SD24 ②	19- 20o	I			420+	50	9	2.5Y4/2暗灰色細縫粘土質シルト		
SD27 ②	19- 4-s	II						5Y4/2灰4オリーブ色シルト質中粒砂（崩壊含む）		
SD28 ②	18- 4-s	II						5Y4/2灰4オリーブ色シルト質中粒砂（崩壊含む）		

(注) 数字のあとに「+」は「以上」を示す。

図 版

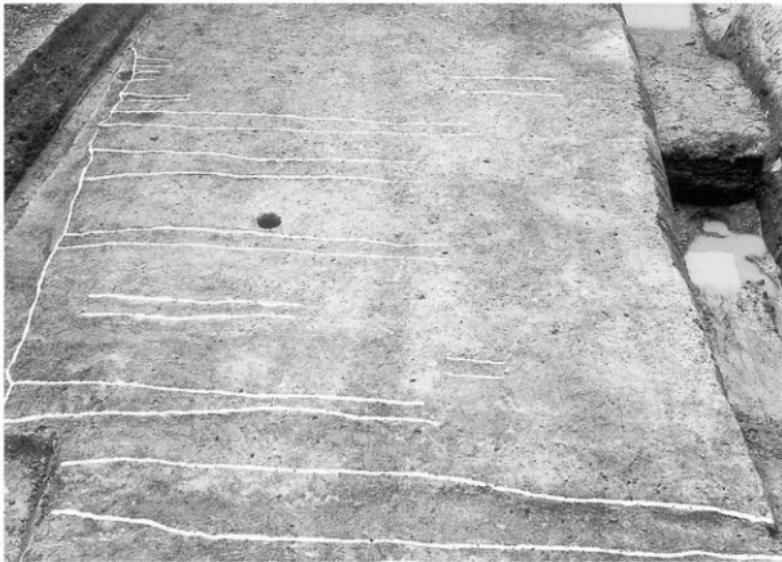
図版1 航空写真

(向かって上が東、左が北)



図版2

①区の調査



1. 動溝群検出状況（東より）



2. 北壁断面

図版3 ①区の調査



1. S D25検出状況（東より）



2. S D25-1層掘削前後状況

図版4

①区の調査



1. SD25-2層掘削後状況（東より）

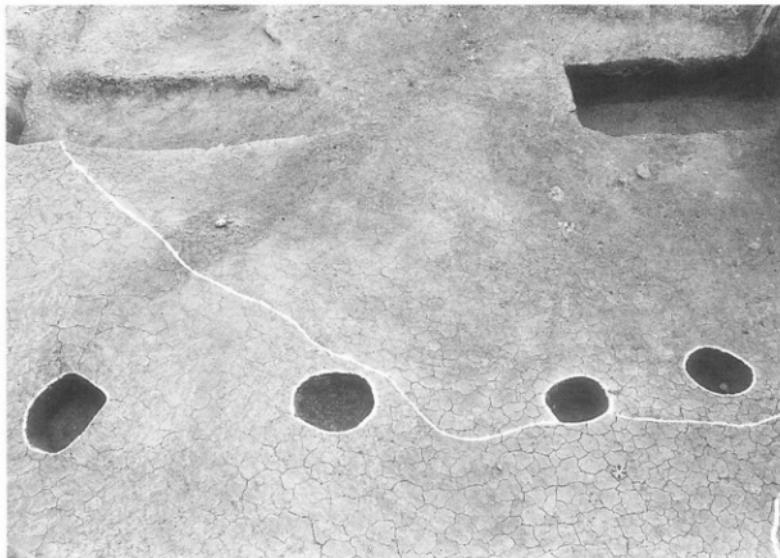


2. SD25-2層掘削後状況（西より）

図版5 ①区の調査

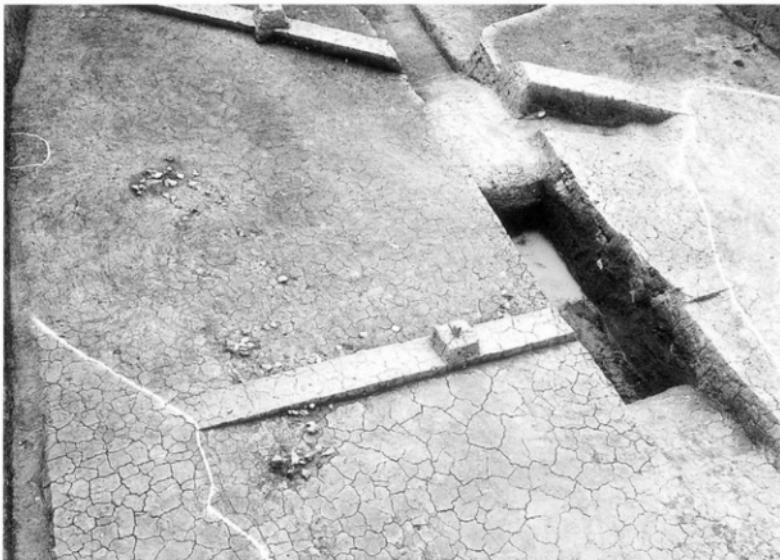


1. SD25南岸土坑・柱列検出状況（東より）



2. SD25南岸土坑・柱列完掘後状況（南より）

図版6
①区の調査



1. SD25-1層内遺物出土状況（東より）



2. SD25-1層内遺物出土状況近景（北より）

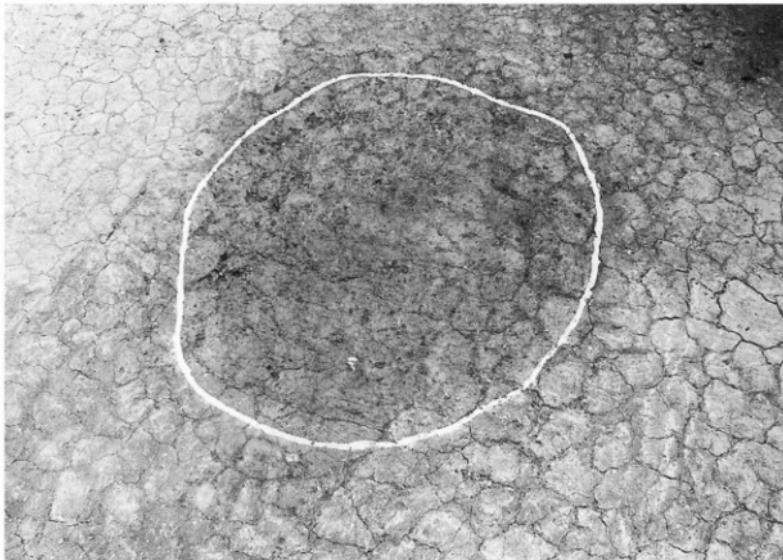
図版7 ①区の調査



1. SD 25-2層内遺物出土状況近景（北より）



2. SD 25-2層内遺物出土状況近景（北より）

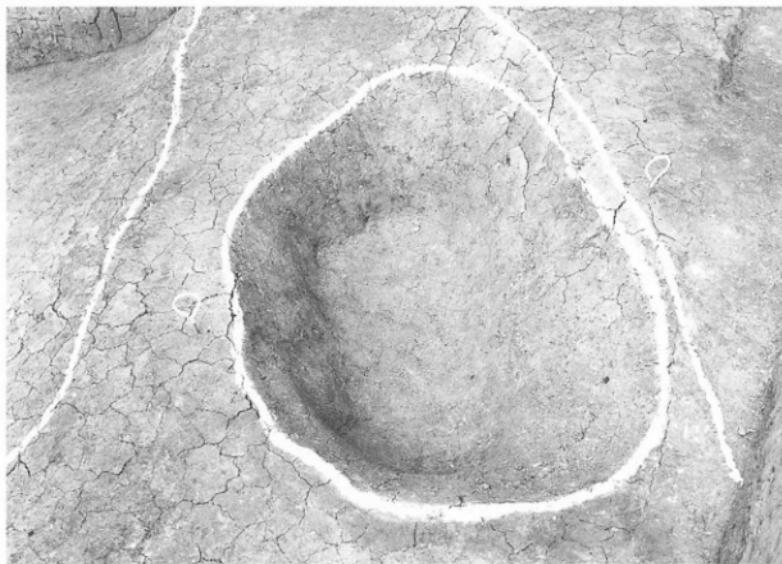


1. SE 1 検出状況（南より）

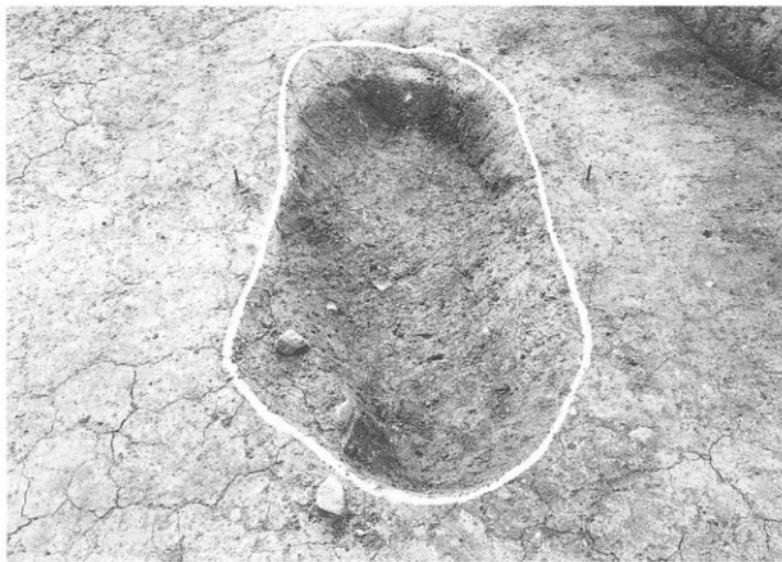


2. SE 1 挖削後状況（西より）

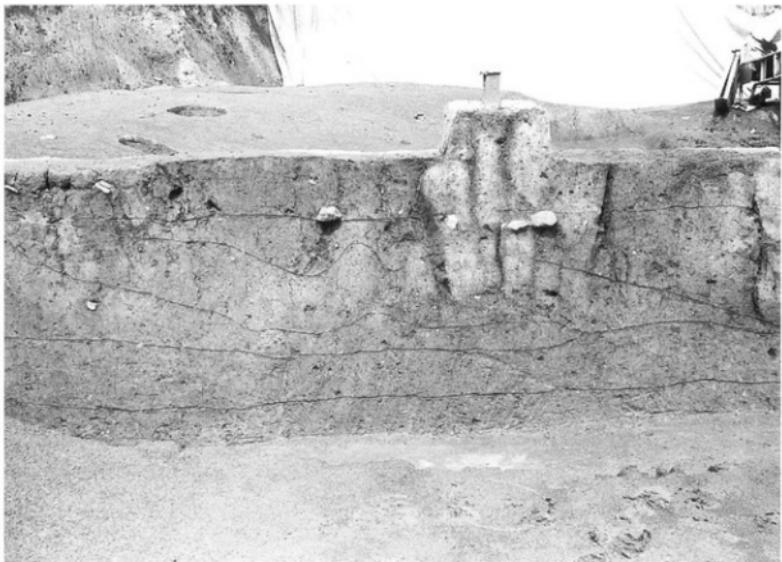
図版9 ①区の調査



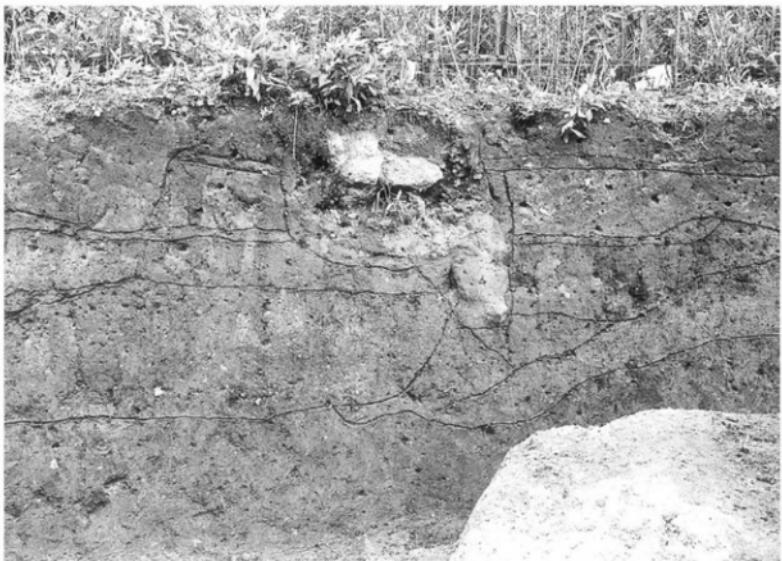
1. SK 6 挖削後状況（西より）



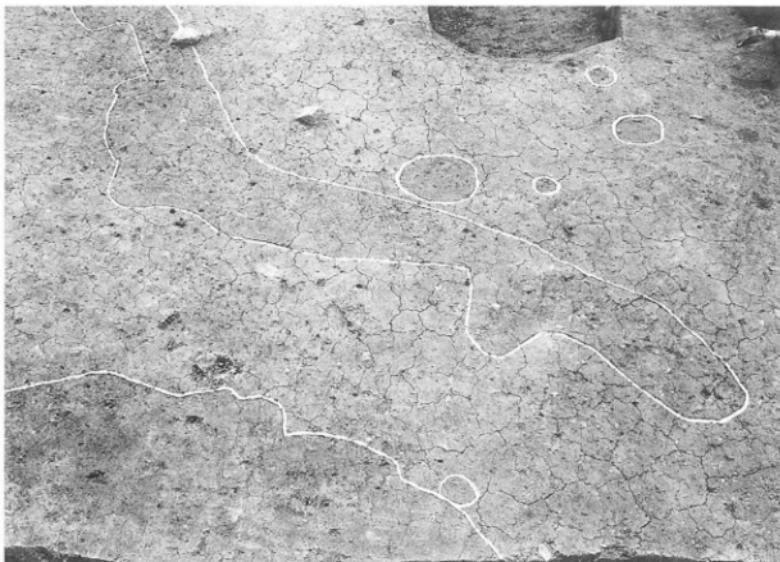
2. SK 7 挖削後状況（東より）



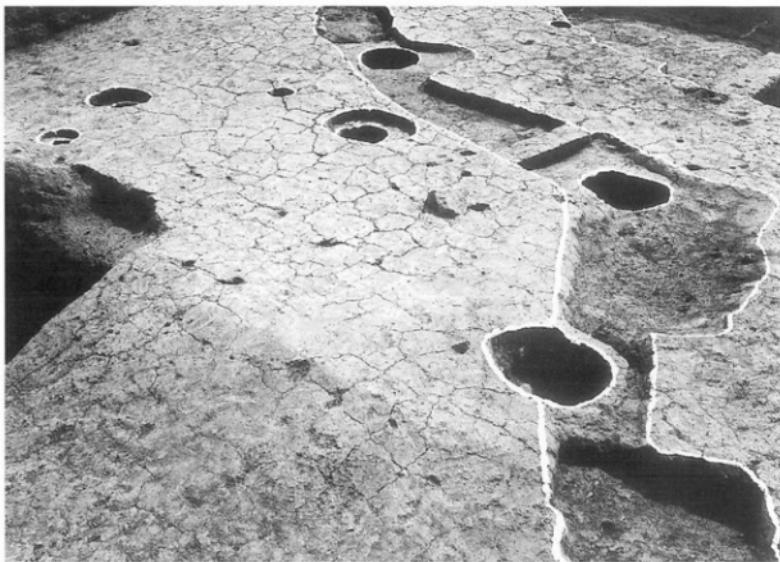
1. SD 25土層断面（中央部）



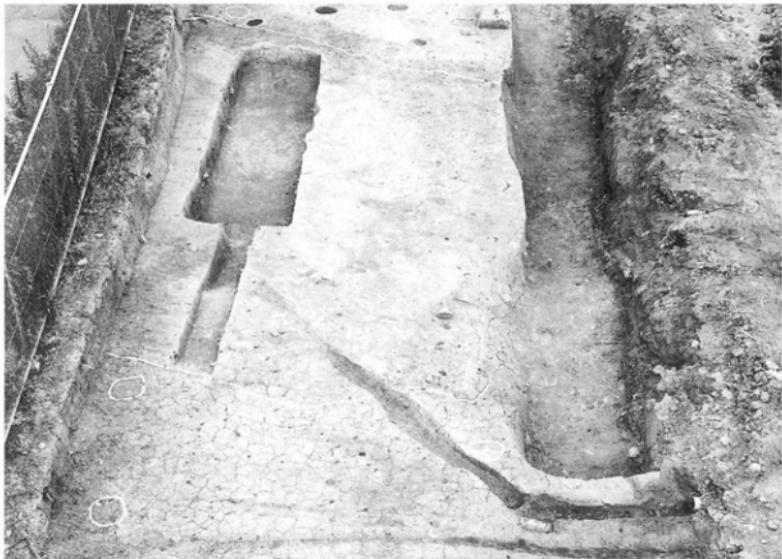
2. SD 25土層断面（西北端部）



1. 遺構面Ⅰ 遺構検出状況（東より）



2. 遺構面Ⅰ 遺構掘削後状況（北より）



1. SD26検出状況（東より）



2. SD26検出状況（北より）

図版 13
②区の調査



1. 遺構面II 遺構掘削後状況全景（S D26中心、東より）



2. S D26掘削後状況（北より）

図版
14

②区の調査



1. SD26内遺物出土状況（西より）



2. SD26内遺物出土状況近景（西より）

図版 15
②区の調査



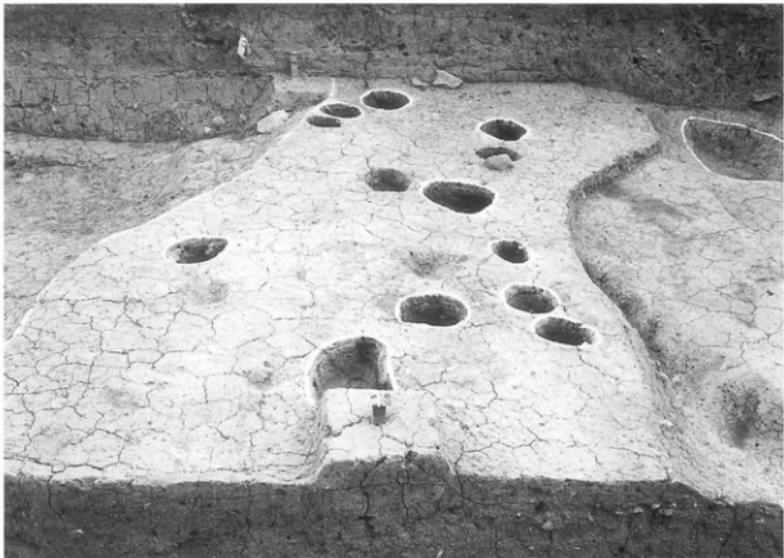
1. 挖立柱建物 1 検出状況（東より）



2. 挖立柱建物 1 挖削後状況（東より）



1. 挖立柱建物 2 挖削後状況（北より）

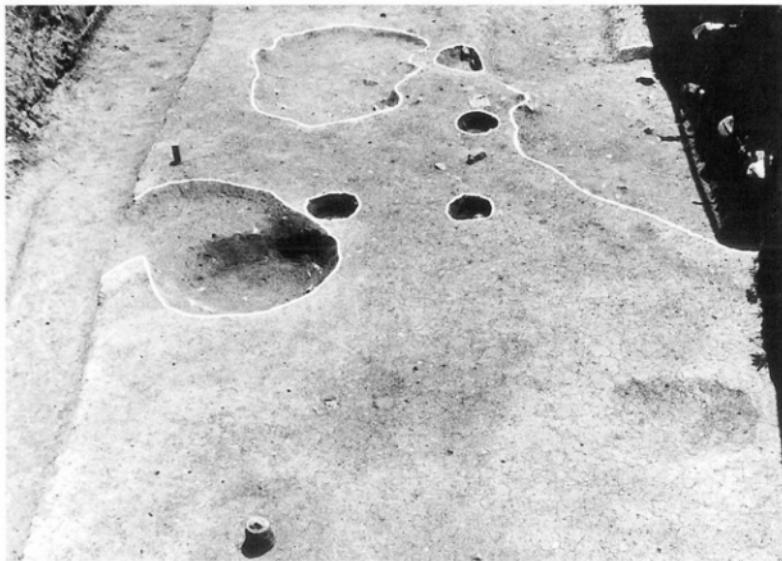


2. 挖立柱建物 2 完掘後状況（北より）

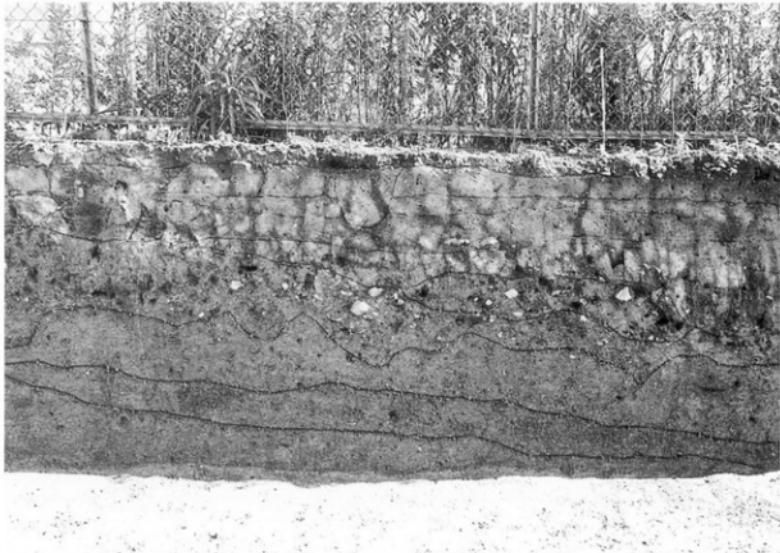
図版 17
②区の調査



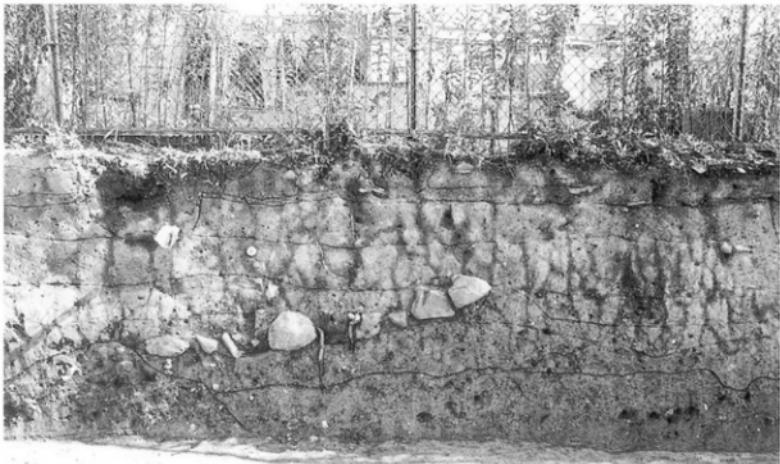
1. 遺構面Ⅲ遺構検出状況（東より）



2. 遺構面Ⅲ遺構掘削前後状況（西より）



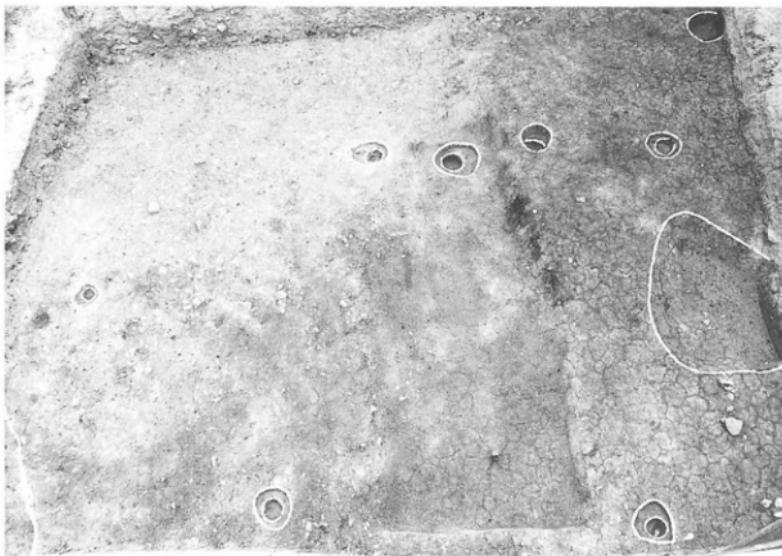
1. 土層断面（東側）



2. 土層断面（西側）

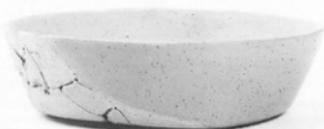


1. 掘立柱建物 3 他検出状況（西より）



2. 掘立柱建物 3 他掘削後状況（西より）

圖版
20
SD25出土土器



7



16



8



15

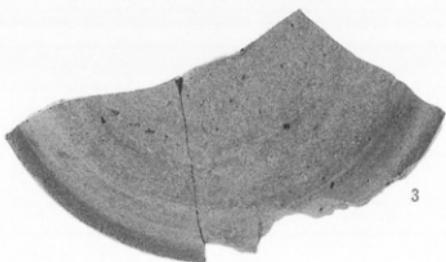
1. 須恵器杯身（7・8・15）皿（16）



1



2



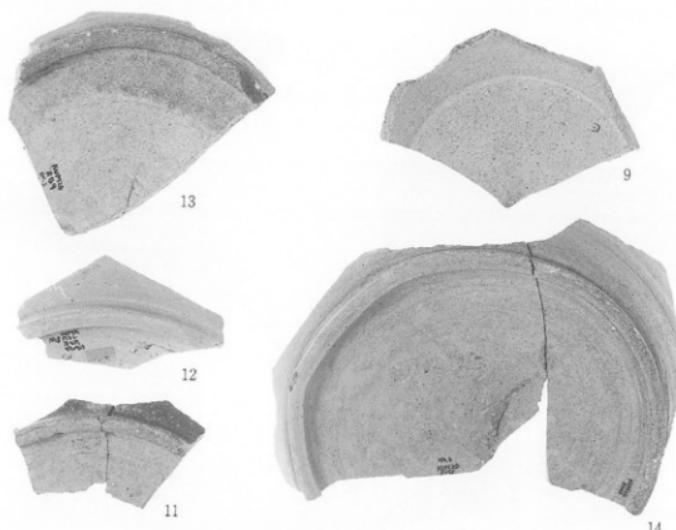
3



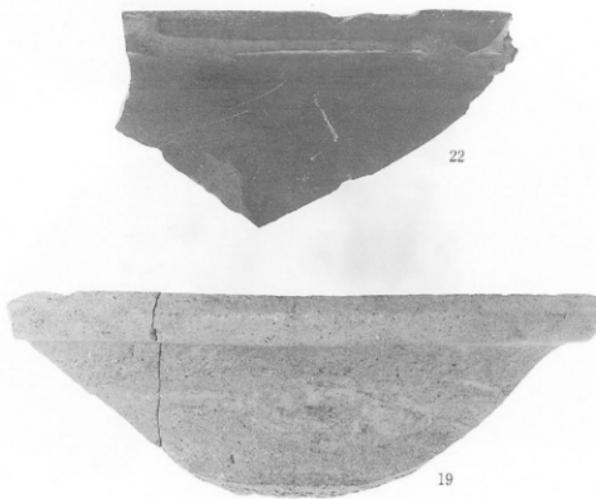
6

2. 須恵器蓋（1～3・6）

図版 21
SD25出土土器



1. 須恵器杯身 (9・11~14)



2. 須恵器臺 (19・22)

圖版 22
SD25出土土器



47



23



25



18

1. 須恵器壺 (17・18・25) 壺 (20・21) 越 (23) 土師器羽釜 (47)

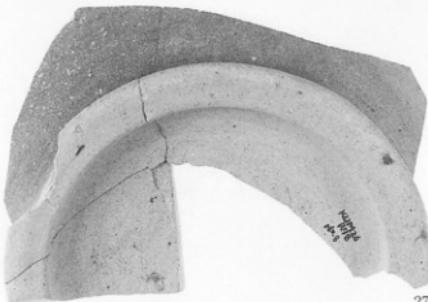
圖版 23
SD25出土土器



24

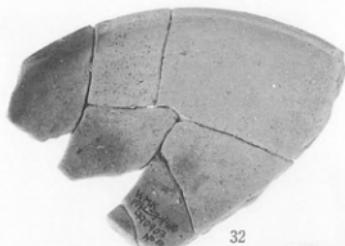


26



27

1. 須惠器壺 (24・27) 杯身 (26)



32



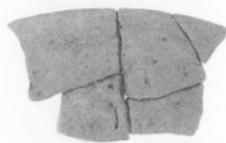
30



31



40



36



38



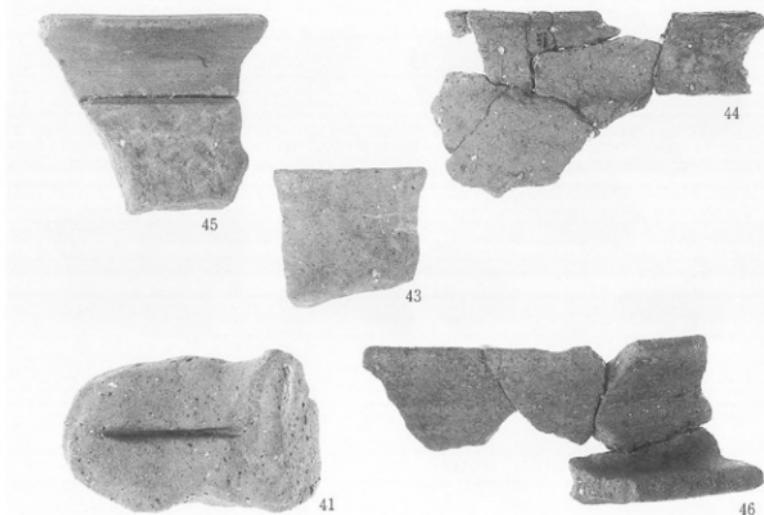
39

2. 土師器杯 (30~32・36・38~40)

圖版
24
SD出土土器

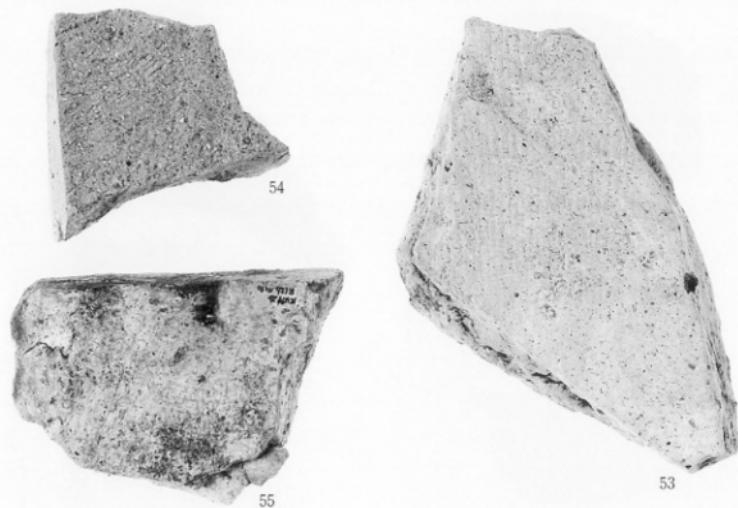


1. 土師器梶（33・34）綠釉陶器梶（35）杯身（51）須恵器壺（50）



2. 土師器把手（41）壺（43）壺（44・45）羽釜（46）

圖版
25
SD
25・SD
26出土土器

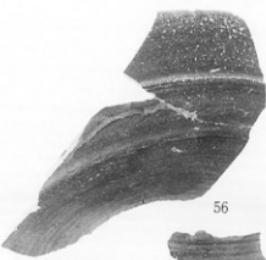
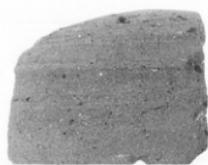


1. 丸瓦（55）平瓦（53・54）



2. 須恵器高杯（57）脚部（58）杯（60）

図版 26
SD26出土土器



56

59



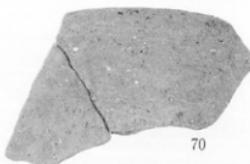
61



1. 須恵器蓋・高杯 (56)・脚部・杯 (59・61)



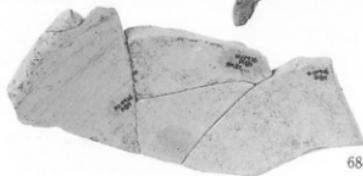
67



70



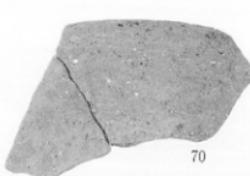
66



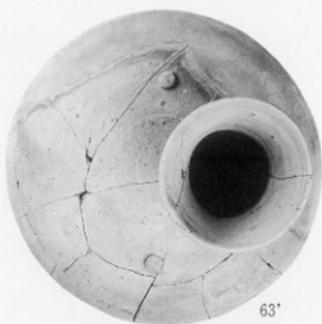
68



69



2. 土器器蓋 (67) 把手 (66) 杯 (68・69・70)



1. 須恵器鉢 (62) 平瓶 (63) 捣鉢 (64) 土器高脚部 (65)

圖版 28
SD 25 出土弥生土器 · SD 26 獸齒

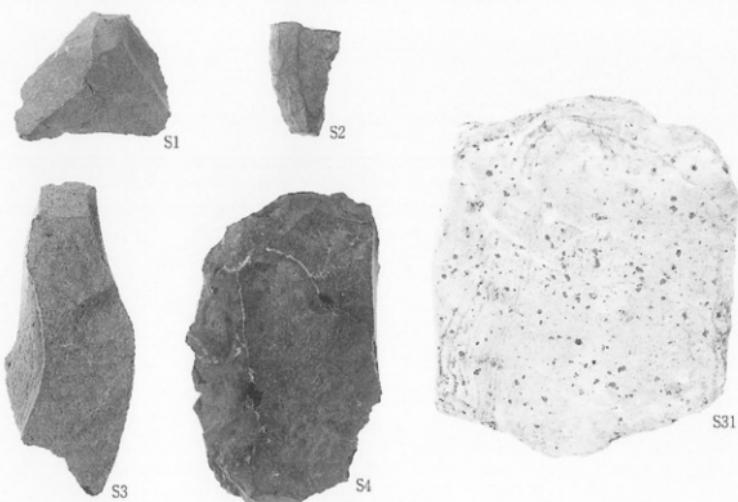


1. 弥生土器

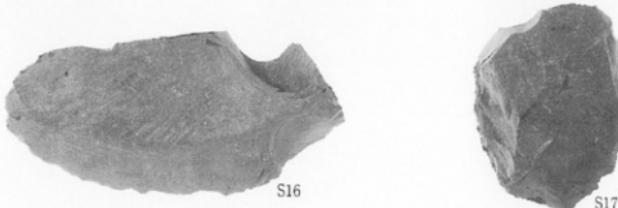


2. 獸齒

図版29 SD25ほか出土石製品



1. 石製品



2. 石製品

報告書抄録

ふりがな 書名	こうなみいせきだい26じはっくつちょうさほうこく 神並遺跡第26次発掘調査報告					
副書名						
卷次						
シリーズ名						
シリーズ番号						
編著者名	菅原章太・横原美智子					
編集機関	東大阪市教育委員会					
所在地	〒577-0843 大阪府東大阪市荒川3丁目4番23号					
発行機関	東大阪市教育委員会					
発行年月日	平成13年3月31日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村 コード	遺跡番号	調査期間	調査面積	調査原因
こうなみいせき 神並遺跡	おおさかふ 大阪府 ひがしおおさかし 東大阪市 ひがしやまちょう 東山町 1180-1	27227		平成12年 6月19日 ～ 8月17日	326m ²	市営住宅の 建替工事
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
集落跡	平安時代前期	溝 ピット 土坑		土師器 須恵器 綠釉陶器 灰釉陶器 瓦		

市営若宮住宅建替工事に伴う

神並遺跡第26次発掘調査報告

平成13年3月31日

発行 東大阪市教育委員会
印刷 (株)近畿印刷センター